Fukushima, Naojiro
Gengogaku Hikaku gengo

言語学

比較言語学

福島直四郎

國語科學講座

—I—

言語學

比較言語學

福島直四郎

株式會社

明治書院

國語科學講座
— I —
言語學

比較言語學

福島直四郎

株式會社
明治書院

はしがき

本書の敍述は著者の私淑するフランスの比較言語學者メイエ教授の著書に負ふ所頗る多い。又畏友二松學舍專門學校教授峰村三郎氏は種々なる點で著者を誘掖せられた。倂せ記して甚深なる感謝の意を表する。

目次

比較言語學

—特に印歐語比較文法に就いて—

福島直四郎

第一章　序説

言語學は言語を研究對象とする科學で、言語のあらゆる現象を種々なる觀點から種々なる方法により研究するものであるが故に、その觀點並に方法の相違に從ひ、幾多の研究部門に分たれる。ある學者は言語起源論・言語本質論・言語變化の原則等一般的問題を檢討し、或は哲學・心理學・論理學・社會學・審美學等の觀點から言語に關する理論を究明する。又ある學者は一國語の文法的構成・歷史・方言分布の實狀を闡明し、或は數國語の一致・相應・類似點を比較研究してその共通起源を探求する。比較言語學はこの最後の部類に屬するが、相類似する數國語を漫然と比較するのではなく、同一の根源から派生したと認められる數國語の構成要素を比較してその共通基礎語を推定し、又逆にその共通基礎語を出發點として發達した各國語の變遷經路を明瞭ならしめんとするのである。勿論起源を共通にせぬ諸種の國語、例へば日本語・支那語・英語等を比較する事が無益であると云ふのではない。これにより思想發表の一般形式・文

法組織の同異・言語變化の共通性等に關する認識を深め、言語現象一般に關する理解に寄與する所多いのであるが、これ等の問題は寧ろ理論言語學に委ねて、比較言語學の領域を限定するのである。故に比較言語學の依つて立つ根據として、共通基礎語・同系語・語族の概念を明確にする必要がある。

古今地球上の隨所に於て使用せられ、或は使用せられつゝある國語の數は夥しいが、その内の若干は互に特殊にして著しい類似點を有し、その現象が決して偶然的一致又は單なる借用關係によつて説明する事の出來ぬ場合がある。

	"父"	"母"
サンスクリット語	pitā́	mātā́
ギリシヤ語	πατήρ	μήτηρ
		(ドーリヤ方言 μά̄τηρ)
ラテン語	pater	māter
古代獨乙語	fater	muoter
トカラ語 A.	pācar	mācar
B.	pācer	mācer

一例として「父」及「母」を意味する單語を古代印度語（＝サンスクリット語）・ギリシャ語・ラテン語・古代獨逸語・トカラ語（嘗つて中央アジヤに使用されたもの）から採つて比較して見る（上表參照）。

時所を異にする數個の國語が文法及び語彙の上にこの種の類似點を多數に示す時、吾人はそれ等の國語が嘗つて使用された一國語から變遷轉化したものであると云ふ假定を設けざるを得ない。即ち、それ等の國語はある共通基礎語が時所の推移に從つて次第に變化したものに外ならぬと認めて、これ等を互に同系なる國語と稱し、互に同系なる全ての國語を總括して一語族と云ふ。これにより比較言語學は共通基礎語の假定の下に、同系語の一致相應點を組織的に研究する言語學の一部門と定義する事が出來る。

從つてインドヨーロッパ語族（以下略して印歐語族）・セム語族・バントゥ語

族等を形成する同系語の比較により、それぐ\印歐語比較文法・セム語比較文法・バントゥ語比較文法は成立する。但し一語族の比較文法はその共通基礎語の全般的再現出を主要なる目的とするものでなく、寧ろ比較研究法の許す範圍に於て、同系語の音韻・文法・語彙に現はれる一致相應點を各別にその出發點に溯らしめて共通基礎語の組織の概要を窺ひ、翻つて各國語の歴史的研究に基礎と背景とを與へるものである。普通に文法を分類して記述文法・歴史文法・比較文法とするが、特定の國語の特定の時代に於ける文法的構成を精確に敍述する記述文法がその國語の歴史文法に缺く事の出來ぬ資料を提供すると同樣、一國語の變遷をその最古の階段からたどる歴史文法こそ比較文法の最も信頼すべき基礎である。何となれば比較文法が共通基礎語の組織を推定する爲には各國語の歴史が示す最も古い形態を以つて最好の資料とするからである。よつてこれ等兩種の文法は互に密接なる關係を有して互に相補ふものと云はねばならぬ。又如何なる語族の比較文法も、如何なる國語の歴史文法も、共に一般言語學及び一般音聲學の原理を參酌し、その指導に從ふべきであると同時に、これ等に確實なる具體的事例を供給するものであるから、言語研究の部門は、一見多岐に分れつゝも、各部門の研究は互に相依り相扶けて、言語現象の究竟的理解を目標として邁進するものと云ふ事が出來る。

さて現今一般に承認されてゐる語族の中、その研究の最も進歩してゐるのは印歐語族である。蓋し他の語族に比して遥に豐富な資料を有し、各國語の歴史的研究も頗る發達してゐる事に起因する。又印歐語比較文法の用ひる研究方法に少くも原則的誤謬なき事は、これを他の語族の研究に應用して得た成績が最も雄辯に證明する所である。故にその專門とする語族の如何に關せず、苟も比較研究に從事せんとする者にとり、印歐語比較文法の一斑を窺つておく事

は決して徒事でない。又本書の著者の專門も印歐語族中の一古代語に存する理由から、以下に用ひる例證は全てこれをこの語族から採る事とした。

附記　印歐語族の概觀

以上により比較文法は若干の同系語を包括する語族を豫想し、その出發點となる共通基礎語の假定に立脚する事を略說したが、これを印歐語比較文法に適用して云へば、印歐語族を形成する一群の同系語を全て印歐語と稱し、その共通基礎語を原始印歐語 (Primitive Indo-European, Urindogermanisch) と云ふ。卽ち、印歐語比較文法は印歐語相互間に於ける相應點を組織的に且つその共通起源を顧慮しつゝ研究する學問で、所謂原始印歐語とはかゝる研究により知り得た文法組織の總和に外ならない。

一語族を形成する同系語の數には勿論際限なく、又語族の概念は純粹に言語學的に規定されてゐるから人種的にも地理的にも何等制限される事はない。語派の概念も語族に準ずるもので、通常語族を若干の語派に分ち、各語派にもそれぞれ共通基礎語を假定し、これ等は更に全語族の共通基礎語に溯り得るものとする。

次に印歐語族を例として、その包括する語派及びその代表的國語を列擧する。

〔一〕インド・イラン語派(Indo-Iranian)　又はアリヤン語派 (Aryan)。

(A) 印度語。廣義のサンスクリット語(Sanskrit)を以つて古代印度語の代表とする。サンスクリット語で書かれた最古の文獻は印度の西北部、主としてパンヂャップ地方で作られた宗敎讚歌を載錄したリグヴェーダ本集 (Ṛg-Veda-Saṃ-

hitā, 2000－1500 B. C. ?) である。その言語は狭義のサンスクリット語即ち古典梵語に對してヴェーダ語（Vedic）と呼ばれる。古典梵語は西暦前四世紀に確立して後、印度の標準文章語として文學及び學術書に用ひられ、今日尚その命脈を保つてゐる。

（B）イラン語。古代波斯語(Old Persian)及びアヴェスタ語（Avestic）を以つて古代イラン語の代表とする。前者はダリウス王(在位 522－486 B. C.) 等アケミニヤ朝諸王の碑文に殘り、後者はゾロアスタ教の聖典アヴェスタの言語で印度に於けるヴェーダ語に類似してゐる。

〔二〕トカラ語派(Tokharian)。トカラ語は中央アジヤに殘存する文獻（西暦七世紀前後）によつて知られる死語。A及びBの二方言を含んでゐる。詳しくは四四頁以下參照。

〔三〕アルメニヤ語派（Armenian)。古代アルメニヤ語、即ち古典アルメニヤ語は聖書の飜譯、並にその他の宗教文獻、歴史書によりて代表せられ、西暦五世紀に溯り得ると云ふ。

〔四〕アルバニヤ語派(Albanian)。主として十六世紀以後の文獻により知られてゐる。

〔五〕ギリシャ語派(Greek)。古代ギリシャ語は多數の方言に分れてゐたが西暦前五世紀アテネ市が政治的並に文學的に優勢な位置を占めて以來、アティック方言（Attic）は文學語として他の方言を凌駕した。これ所謂古典ギリシャ語である。かのホーマーの敍事詩の言語(Homeric)は大體に於てイオニヤ方言（Ionic）であるが、その原形はエオリヤ方言(Aeolic)と認められる。要するに同一時代に一人の筆に成つたものではないが、その主要部分は他のギリシャ文學より古い。この外尚有力な方言としてドーリヤ方言(Doric) を擧げる事が出來る。これ等の古代ギリシャ方言は豐

富なる碑文によつて知られ、印度のヴェーダ語と並んで印歐語比較文法に最も貴重な資料を提供する。

〔六〕イタリヤ語派(Italic)。 伊太利半島には古代種々な方言(オスク語・ウンブリヤ語等)があつたが、羅馬を中心とするラティウムの方言即ちラテン語(Latin)により壓倒された。所謂古典ラテン語は西暦前一世紀に確定したものである。又ラテン日常語が次第に變遷して現今のロマンス諸語(Romance languages)、即ちフランス語(French)・イタリヤ語(Italian)・スペイン語(Spanish)・ポルトガル語(Portuguese)等となつた事は周知の事實である。

〔七〕ケルト語派(Celtic)。 古代ケルト語の代表としては、(一)歐洲大陸に殘存する碑銘により知られるガリヤ語(Gallic)、(二)八・九世紀に屬する古代アイルランド語(Old Irish)、(三)同じく八世紀より知られる古代ウエールス語(Old Welsh)を擧げる事ができる。就中重要なのは第二のものである。

ケルト語派とイタリヤ語派とは特殊な類似點を有し、他の語派に比して兩者の間には更に密接な關係を認め得る故、兩語派の共同時代を豫想し屢〻之を總稱してイタロ・ケルト語派と云ふ。

〔八〕スラブ語派(Slavonic)。 最古の文獻は九世紀に屬する聖書の飜譯で、その言語を古代教會スラブ語(Old Church Slavonic)と云ふ。方言的にはブルガリヤ語に最も近い故、屢〻古代ブルガリヤ語(Old Bulgarian)とも稱せられる。近代語の中、ロシヤ語(Russian)・ポーランド語(Polish)・チェック語(Czech)・セルビヤ語(Serbian)・ブルガリヤ語等は之に屬する。

〔九〕バルト語派(Baltic)。 現代の代表語としてはリスアニア語(Lithuanian)及びレット語(Lettic)があり、その文獻は共に十六世紀以降に屬してゐるが文法は古風な特徴に富み、殊にリスアニヤ語は近代語中、印歐語比較文法の最

珍重する所である。又今は死語なる古代プロシャ語（Old Prussian）もこの語派に屬した。

バルト語派とスラブ語派とは種々な點で頗る類似してゐる故、その共同時代を豫想しバルト・スラブ語派なる名の下に總括する學者が多い。但しこの見解に對しては相當に有力な反對のある事も忘れてはならぬ。

〔一〇〕**ゲルマン語派**(Germanic)。現代語としては英語・獨逸語・和蘭語（Dutch）・丁抹語（Danish）及びスカンディナヴィヤ諸語を含むが、比較方法は死語たるゴート語（Gothic）及び古代アイスランド語（Old Icelandic）・古代高地獨逸語（Old High German）・古代英語（Old English）等を主要なる資料とする。就中ゴート語は四世紀に屬する聖書の飜譯によつて代表せられて最も貴重なゲルマン語とされてゐる。

〔一一〕**ヒッタイト語派**(Hittite)。嘗つて小アジヤに行はれた死語。近時發掘せられた文獻は西曆前一四〇〇年頃に屬すと云ふ。但しヒッタイト語は既知の印歐語とは著しく異る點が多く、前記の諸語派と全く同列には論じられない。詳しくは五二頁以下參照。

尙この外僅少なる文獻により知られてゐる印歐語も若干存在するが、その所屬等に關しては尙議論の餘地ある故、今は之を省く。又玆には以下の說明に例證として用ひる印歐古代語を主として列擧したに過ぎないが、上記の十一語派中トカラ語派とヒッタイト語派とを除き、他の諸語派は皆連綿として現今まで存續し、且つ各〻複雜なる方言分布を包藏し、又英・獨・佛語の如く文化語として世界に雄飛してゐるものもある。これ實に印歐語族が言語學的にも文化史的にも重きをなす所以であるが玆に細說する遑はない。

次に讀者の便宜のため、略字の說明・發音略解を揭げる。

略字の説明

Alb.	=	Albanese	アルバニヤ語
Arm.	=	Armenian	アルメニヤ語
Av.	=	Avestic	アヴェスタ語
Fr.	=	French	フランス語
G.	=	Primitive Germanic	原始ゲルマン語
Goth.	=	Gothic	ゴート語
Gr.	=	Greek	ギリシヤ語
Hitt.	=	Hittite	ヒツタイト語
Hom.	=	Homeric	ホーマー叙事詩の言語
IE.	=	Primitive Indo-European	原始印歐語
Ital.	=	Italian	イタリヤ語
Lat.	=	Latin	ラテン語
Lith.	=	Lithuanian	リスアニヤ語
MIr.	=	Middle Irish	中期アイルランド語
NE.	=	New English	近代英語
NHG.	=	New High German	近代高地獨逸語
OChSl.	=	Old Church Slavonic	古代教會スラブ語
OE.	=	Old English	古代英語
OHG.	=	Old High German	古代高地獨逸語
OIc.	=	Old Icelandic	古代アイスランド語
OIr.	=	Old Irish	古代アイルランド語
ORuss.	=	Old Russian	古代ロシヤ語
OWelsh	=	Old Welsh	古代ウエールス語
Skt.	=	Sanskrit	サンスクリツト語(古代印度語)
Span.	=	Spanish	スペイン語
Tokh. A	=	Tokharian A	トカラ語A方言
〃 B	=	〃 B	〃 B方言

* 假定形の符號

✓ 語根の符號

Sanskrit:

e = ē, o = ō,

ṛ, ḷ = syllabic r, l,

序 c = English ch 〔tʃ〕, j = 〔dʒ〕,

ṭ, ḍ like Eng. t, d,

說 t, d like French t, d,

ṅ = Eng. ng 〔ŋ〕,

ñ = Fr. gn 〔ɲ〕,

ṃ = pure nasal,

ś = German (i)ch 〔ç〕,

ṣ = Eng. sh 〔ʃ〕,

h = a kind of voiced h,

ḥ = h

Avestic:

ą = 〔ɑ̃〕, å = āɔ

x = Ger. (a)ch〔x〕, γ = 〔g〕,

θ = Eng th(in)〔θ〕, δ = 〔ð〕,

č = 〔tʃ〕, ǰ = 〔dʒ〕,

ŋ = 〔ŋ〕,

š = 〔ʃ〕, ž = 〔ʒ〕.

Armenian:

c = 〔ts〕, j = 〔dz〕,

č = 〔tʃ〕, ǰ = 〔dʒ〕,

ł = velar l,

ṙ = strongly rolled r,

š = 〔ʃ〕, ž = 〔ʒ〕,

Old Church Slavonic:

ǫ = 〔ɔ̃〕, ę = 〔ɛ̃〕,

ě = 〔ɛ〕, y = Russian ы,

j = 〔y〕, x = 〔x〕,

c = 〔ts〕, č = 〔tʃ〕,

š = 〔ʃ〕, ž = 〔ʒ〕,

Lithuanian:

ė = ē, ë = ie,

ů = uo, y = ī,

j = 〔y〕

c = ts, cz = 〔tʃ〕, dż = 〔dʒ〕,

sz = 〔ʃ〕, ż = 〔ʒ〕

Old Irish:

á, é, etc. = ā, ē, etc.,

ch = 〔x〕, th = 〔θ〕,

Gothic:

aí = e, ái = ai,

aú = o, áu = au,

ei = ī,

þ = 〔θ〕,

Tokharian:

like Sanskrit,

ä = 〔ə〕 ?

發音略解

多數の國語の發音を詳説する遑はないが、例として用ひられる單語を略正しく讀み得るために簡單な說明を加へておく。母韻文字 a e i o u は概してローマ字の如く讀み、子音文字も亦通則としてローマ字の如く讀めばよい。又母韻文字の上にある横線は長音を示すが、古代アイルランド語、古代アイスランド語、古代英語に於てはこの代りに ⸝ なる符號を用ひる。但しサンスクリット語及びリスアニヤ語に於ては ⸝ 〜 によつてアクセントの位置を示す。右に發音上注意すべき諸點を擧げたが、角括弧内の文字は音聲學が普通に用ひる發音符號である。

第二章　言語變化の規則性

同一語族に屬する以上、吾人の假定する共通基礎語と如何程の距離があつても歴史的には等しく基礎語の連續と見るべきで、その間何等の斷絕を許さない。印歐語族に屬する國語中、頗る複雜な文法を有するサンスクリット語も、極度に簡單な近代英語も共に原始印歐語の連續である點に於ては何等相異る所はない。變革の程度の如何に拘らず、各國語の變遷發達を歴史的に研究し、又は一語族に屬する一群の國語を比較してその共通基礎語の組織を探求し得るのは實に言語變化の規則性によるのである。この前提なくしてはあらゆる語源研究は邪道に陷り、歴史文法も比較文法も共にその根據を失ふに至る。言語變化の規則性を確認すると否とは科學的近代言語學と奔放なる往時の言語論とを區別する最も顯著な相違點と稱すべきである。但し言語變化の規則性及び之と交錯する諸種の現象の理論的考察は一般言語學の領域に屬し（神保格氏「言語學概說」石黑魯平氏「言語史講話」參照）、比較文法はその根本原則を承認して

之を實際上に運用すれば足りるのである。故に玆では比較文法の常識として極めて簡單な解說を施すに止める。

言語は時の經過につれ、常に多少の變化をする。例へば古代英語と近代英語、ラテン語とフランス語とを比較すれば隔世の觀深きものがある。然し言語は不規則放縱に推移するものでなく、その變遷は著しい規則性を帶びてゐる。今ラテン語の人稱代名詞 mē, tē がフランス語に於て夫々 moi, toi となつた事を知る時、之等と音形に關しても條件を同じくし、又文法的にも同じ範疇に屬するフランス語 soi に對し、ラテン語を知らない者でも直ちに sē と答へて誤謬に陷らない。同樣に、OHG. mīn, dīn : NHG. mein, dein なるが故に、NHG. sein に對しては OHG. sīn を豫想し得る。かくの如く音韻變化の示す規則的結果を要約し、その相應を表示したものを通常音則(law of sound-change, Lautgesetz, loi phonétique) と稱してゐる。上例に於て OHG. ī : NHG. ei [ai] は一個の音則である。之と同じ相應を示す一群の單語に於てその母韻は音則的に變化したと云ふ(上表參照)。

OHG.	NHG.	
līb	: Leib	‘身體’
nīd	: Neid	‘嫉妬’
rītan	: reiten	‘騎行する’
stīgan	: steigen	‘登る’
swīn	: Schwein	‘豚’
wīn	: Wein	‘葡萄酒’
zīt	: Zeit	‘時’

同一語族に屬する同系語は皆その共通基礎語の繼續である故、同系語間に於ても亦規則正しい相應を發見し得べきである。例へば、

L.		NE.		NHG.	
duo	:	two	:	zwei	‘二’
decem	:	ten	:	zehn	‘十’
dens	:	tooth	:	Zahn	‘齒’

に於ける第一子音について見れば L. d : NE. t : NHG. z[ts] なる相應が規

則正しく行はれてゐる。更にサンスクリット語及びギリシャ語から之に相當する單語を擧げれば夫々

Skt.	dvấu,	dáśa,	dā́na.
Gr.	δύο,	δέκα,	δῶρον.

これによりこゝに問題となつた子音の原形をdと推定する時、IE. d : Skt. d : Gr. δ : L. d : NE. t : NHG. z なる相應の方式に到達する。

以上言語變化の規則性、並に之を前提として便宜上設定する音則について略說したが、所謂音則なるものは言語變化の跡を顧みて歸納した現象を要約したものであるが故に、只經驗的價値を有するのみで、何等必然的又は命令的效力を有するものではない。この點に於て音則は自然科學の法則と全く性質を異にする。ある國語の音組織中の一要素がその傳承過程に於て變化する時、特殊な原因により妨げられぬ限り、原則としては除外例を許さぬと云ふ事は經驗上認容さるべきであるが、無條件なる音則も亦稀有であるを忘れてはならぬ。音節の構造、アクセント殊に强勢の位置等は屢〻音韻變化の條件となり、又結合子音の變化は單一なる子音の變化と趣を異にする事多く、更に同化(Assimilation)・異化(Dissimilation)・音位轉換(Metathesis)・類音省略(Haplology)等の現象は言語の變化を益〻複雜ならしめる。故に音則については常にその條件を明確にし、尙且つ音則に適合しない例外に對しては、之を妨げる特殊の原因を探らねばならぬ。

特殊の單語は一般的音則に從はず獨特なる變化をする事がある。例へばフランス語 monsieur [m(ə)sjø] 及び獨逸語で「今日」を意味する heute [hɔytə] (OHG. hiutu) は夫々 mon sieur 及び hiu tage の正規なる變遷形とは云ひ

難い。又獨立性を失つて單なる文法的機能を保つ言語要素も特別な變遷を伴ふことがある。例へばフランス語の冠詞 le, la, les は夫々ラテン語の illum, illam, illōs (illās)を繼續するものであるが、語頭母韻の脫落はその文章中に於ける接頭的用法(proclytic use)によつて說明せらるべきである。

所謂音則と交錯する現象のうち、最も重要なものゝ一つとして類推(Analogy)を擧げねばならぬ。ラテン語に於て「名譽」を意味する honōs の目的格としては honōsem が豫期せられるが、ラテン語に於ける特殊の音則により母韻の中間にある s は r となるから(rhotacism)、先づ honōs : honōrem となるは當然である。然し主格が honor となつたのは音則的とは云ひ難く、ōrātor : ōrātōrem 等の型に則つて honor : honōrem となつたと考へられる。かくの如き變遷を表示すれば、 ōrātōrem : ōrātor = honōrem (<*honōsem) : honor (honōs の代り) となり、かゝる變遷を類推に依る變化と云ふ。更に一例を擧げればラテン語で「元老院」を意味する senātus は第四種變化に從つて所屬格 senātūs を有するにも拘らず、更に第二種變化の所屬格形 senātī をつくるに至つたのは animus : animī = senātus : senātī なる類推に基くものである。但しこの場合は senātus と屢々並用される populus : populī をモデルとしたと云ひ得る故、類推の直接起因をも明瞭ならしめる事が出來るが、通常文法上の形態に起る類推は、寧ろ變化樣式の型を起因と考へれば足り、個々の場合の起因として特定の單語を探索するには及ばない。勿論意義上密接に關係する單語の間には音形上の接近を來す事がある(contamination)。例へばアルメニヤ語に於て「息子」を意味する ustr はその接尾要素(-tr)に關して他の印歐語と著しく異るが(Gr. υἱός, Toch. A se, B soy, Skt. sūnús, NE. son, NHG. Sohn, etc.)、之は「娘」を意味する dustr (Skt. duhitā́, Gr. θυγάτηρ, Toch. A tkācer, B ckācar, NE. daughter, NHG. Tochter)

に接近したものと説明される。又イタリヤ語・スペイン語・ポルトガル語の grave はラテン語 gravis「重き」の繼續であるが、イタリヤ語 greve フランス語 grief プロヴァンサル語 greu は皆基礎形として *grevis を豫想せしめる。この場合ラテン語の正規形 gravis の傍に、意義上之と對立の關係にある levis「輕き」に接近した *grevis が生じ、ロマンス語の一部に繼承されたものと考へられる。之と少しく趣を異にするが音形と意義との連想を基として起る所謂通俗語源 (popular etymology, Volksetymologie) がある。有名な一例を擧れば古代獨逸語に於て「大いなる洪水」を意味した sin-vluot が特殊な宗教的意義をもつに至つて Sünde「罪」なる語を連想し Sündflut と改變されるに至つた類である。

以上皆音則と交錯して例外形を惹起する現象であるが、玆に最も注意すべきは文法上の變化樣式に關する規則化・單純化の傾向である。古代に於て英語名詞の複數形は種々あつたに拘らず、近代英語に於ては少數の例外を除き、皆〔-s〕に終つてゐる。これを歷史的に見る時は規則化の傾向に負ふ所が多い。一例を取るに「牛」を意味する語の變化は OE. cū : pl. cy (ME. ky or kine)であつたのに反し、現今は cow : cows となつてゐる。これは sow : sows 等の型に倣つたもので、その他多くの名詞も古來の複數形を棄てゝ、〔-s〕複數形を取るに至り、近代英語の文法は著しく單純化された。又ラテン語 amāre「愛す」の現在單數形 amō, amas, amat に對しフランス語に於ては aim, aimes, aime(t) を豫期するが、二人稱・三人稱に倣つて一人稱も亦 aime となるに及び、aimer と同一變化に屬する全ての動詞は一人稱を〔-e〕に終らしめ除外例を許さない。結果に於ては音韻變化と同樣な規則性を示す故、かゝる現象を音則に對して形態方則 (lois morphologique) と呼ぶ學者もある。

類推及び之に準ずる現象の外、借用(borrowing, Entlehnung, emprunt)も屢々音則に對する例外の原因をなす事がある。正規な音則的變遷と借用による結果との差異を最も明瞭に示すのは、ロマンス語に於ける所謂對似語(doublet, Doppelform)である。フランス語 frêle : fragile イタリヤ語 frale : fragile に於て frêle, frale は何れもラテン語形 fragilem の正規なる變遷を代表するが、fragile は後世文章語から借用したものでラテン語 fragilis の音則的變化とは區別せねばならぬ。然し借用現象も一般化された時は音則と同樣の規則性を示すことがある。今フランスに於て巴里の發音を模倣し、自分の方言で twe (=toi), mwe (=moi), rwe (=roi)と發音すべき場合に twa, mwa, rwa と發音する者は、あらゆる場合に〔we〕と〔wa〕との交迭を行ひ、この傾向が一地方に一般化されるに至ればその結果は音則と區別なき觀を呈するに違ひない。かゝる現象は二方言或は二國語の接觸する場合常に起り得る事で、ある國語が他の國語と接觸せず全く孤立して變遷したと云ふことは想像し難い所であるから、古來方言或は國語の接觸混和(Dialekt-, Sprachmischung) に基く音韻變化も屢々あつた事を考へねばならぬ。

以上の如く言語變化は複雜な現象であるが、その間に一定の規律があり、一見例外の樣に見える場合でも一定の條件或は特殊な原因を發見して說明し得る事が多い。勿論現時歷史文法及び比較文法によつて說明し盡されない點は枚擧に遑ないのであるが、之により原則を疑ひ、或は比較研究の可能性を否定し去る事は出來ない。音則に對する例外を指摘してその價値を疑ふ者は飜つて音則により說明される事實の如何に多いかを顧ねばならぬ。吾人が一國語につき知る處はその最良の場合に於てする九牛の一毛に過ぎぬ。殊に印歐語比較文法の如く主として古代語を對象とする場合は、古代文獻を唯一の憑據とする故、口語體、方言分布等に關する知識を缺き、文字の表示する音價には音聲學

的正確は期待されず、且つ古代に於て印歐語を使用した國民については明瞭な歴史的・地理的知識に乏しく、從つて征服者と被征服者又は移住者と先住者との間に屢々起る言語轉換(Sprachwechsel)の事實に暗く、例へ歴史的事實として之を認め得る場合でもその結果亡びていつた國語の記錄をもつてゐない。最も有利な條件を具備してゐるロマンス語比較文法學者ですら刻々にその缺陷を痛感してゐる。かゝる狀態にあつても尙原始印歐語の音組織を窺知し、文法的構成の大要を推定し得るのは、言語變化の規則性を根本原則とし、之を妨げる諸現象を識別し、細心にして確實なる比較研究法を適用するが故である。

第三章　研究の方法

あらゆる歴史的言語研究は比較によつて行はれる。同一國語の一時代を他の時代と比較する場合も、數個の國語を比較してその基礎形を尋ねる場合も、皆比較研究法による外はない。比較文法は文獻に殘る事實を比較し、かゝる分派を來した基礎形如何を考へる。歸納的に推定された基礎形はそれから分派した諸形を無理なく說明し得るものでなくてはならぬ。ドゥ・ソシュール(F. de Saussure)の用語に從へば、比較文法は通時言語學(la linguistique diachronique)に屬し、その方法は回顧的(la méthode rétrospective)である。

比較文法は共通基礎語を全般的に再現出し、これを用ひて文章を綴り、或は之を會話に用ひて發音の正確を期するものではない。吾人の有する資料と吾人の用ひる研究法とは決してかゝる意味の再現出を可能ならしむるものではない。然し比較研究法の究竟する所は再現出にあり、又再現出は比較によつてのみ行はれ得るものであるから、比較に

よる再現出の意味と價値とを充分に知つておかねばならぬ。

如何なる場合に於ても再現出は假定に止り、實在國語の一致相應點のみが事實である。然し多數の國語を比較して得た結果を簡明に表現するには、音素・格語尾・人稱語尾等のみならず、出來得れば單語の全貌をも再現出する方が、推理考察の基礎として研究上頗る便利である。既に假定と云ふ以上再現出された言語要素は絕對的なものでなく、知識の進步につれ、學說の變動に從ひ、改善され是正さるべきは云ふまでもない。

印歐語比較文法はその出發點たる共通基礎語を知らず、全く比較研究による再現出に委ねられてゐる。この點に於て出發點たるラテン語を知るロマンス語比較文法と大いに異る。語派の概念は語族の概念に準ずることは既に述べたが、ギリシャ語派にしろゲルマン語派にしろ、原始ギリシャ語或は原始ゲルマン語は與へられてゐない。古代ギリシャ諸方言及び古代ゲルマン諸語を比較して夫々その語派の共通基礎語を再現出する外に途はない。之に反しイタリヤ語派に屬するロマンス諸語は現代に於ても互によく類似し、且つ數世紀に亙る豐富な文獻を保有してゐるのみならず、その共通基礎語を代表するラテン語自身が詳しく知られてゐる。故にロマンス語比較文法は常に進步的な見解と巧緻な研究法とにより指導的位置を占め、印歐語比較文法を稗益する所少くない。

Spanish	Italian	French
uno, una	uno, una	un, une
dos	due	deux
tres	tre	trois
cuatro	quattro	quatre
cinco	cinque	cinq
seis	sei	six
siete	sette	sept
ocho	otto	huit
nueve	nuove	neuf
dies	dieci	dix

今一例として數詞一から十を比較して見るに上表の如くである。言語學者ならずとも一見してその類似を指摘し、共通起源の假定に想

到するであらうが、この場合その共通出發點はラテン語として與へられて居り、ロマンス語學者は唯直接基礎形として通俗ラテン語の推定に從事すればよい。ロマンス語比較文法はある意味に於て印歐語比較文法の縮少圖に喩へられるが、逆に後者はラテン語を失へるロマンス語比較文法に擬へ得るのである。

次に數種の印歐語より數詞一から十を並記して見る。

Sanskrit	Greek
ékaḥ, ékā, ékam	εἷς, μία, ἕν
dváu, dvé	δύο
tráyaḥ, tisráḥ, trī́ṇi	τρεῖς, τρία
cátvāraḥ, cátasraḥ, catvā́ri	τέτταρες, τέτταρα
páñca	πέντε
ṣáṭ	ἕξ
saptá	ἑπτά
aṣṭáu	ὀκτώ
náva	ἐννέα
dáśa	δέκα

Latin	Gothic
ūnus, ūna, ūnum	áins, áina, áin
duo, duae, duo	twái, twos, twa
trēs, tria	*þreis, þrija
quattuor	fidwor
quinque	fimf
sex	saíhs
septem	sibun
octō	ahtáu
novem	niun
decem	taíhun

Armenian	Tokharian A
mi	sas, säṃ
erku	wŭ we
erekh	tre, trī
čorkh	śtwar
hing	päñ
vec̣	ṣäk
ewthn	ṣpät
uthn	okät
inn	ñu
tasn	śäk

　これ等を比較し共通基礎形を推定するのは容易でない。同じく比較文法でも基礎の與へられたる場合と然らざる場合とでは難易の差著しきものがある。ラテン語を知らずしてロマンス語相互の比較のみによつて歸納した結果が多くの點に於て正確を缺くべきはロマンス語比較文法の如實に訓へる所である。又時代の推移に從ひ言語は甚しき變遷をする事がある故、近代ゲルマン語のみの比較によつて原始ゲルマン語の組織を推定し、或は近代スラブ語のみを知つて之を直ちにサンスクリット語・古代ギリシャ語と比較するならば、印歐語比較文法は著しく正確性を減ずるに至るであらう。幸にして吾人はゴート語等の古代ゲルマン語を知り、古代教會スラブ語の記録をもつてゐる。近代の文獻によつてのみ知られるリスアニヤ語は偶然古風な文法を持續してゐる。尙偶然は中亞の一角からトカラ語の文獻を提供した。かゝる好條件に惠れつゝも印歐語族を代表する諸國語は各獨特の變遷を經て、程度の差こそあれその基礎語を相距ること少くないことは數詞の比較表を一瞥して明瞭である。數詞の如く比較的に相似た單語に於ても、これを全體的に比較しては確實な結果に達し得ない。故に比較文法は一音素 (phoneme) づつ比較してその基本音を推定し、共通基礎語の音組織を回復

せんとする。

Skt. bhárāmi 'I bear, carry', Av. barāmi, Arm. berem, Alb. bie, OChSl. berǫ, Lith. berìu, Gr. φέρω, Lat. ferō, OIr. do-biur, Goth. baíra, Toch. A pärtsi (Inf.).

この一列の單語を比較し、語頭の子音のみに着目すれば Skt. bh : Gr. φ (=ph) : Lat. f : Arm. etc. b : Toch. p なる相應を認め得る。之により基礎音素が唇音であつた事は疑ない。トカラ語は有聲破裂音をもたない國語故暫く措き、他の國語に就いて考へる時、共通基礎音素が有聲音であつた事も推定するに難くない。且つサンスクリット語及びギリシャ語はその音が單純な有聲唇破裂音 b でなく、之に一種の喉氣音を伴つた事を指示してゐる。よつて之を有聲帶氣唇破裂音の一種と認めて bh なる符號で表はす。bh で示す音素の正確な發音は決定できずとも、原始印歐語に於て p でもなく b でもなき一音素の存在は明瞭に推定せられ得た事になる。之を基礎として考へれば、*bh はギリシャ語に於て ph となり、ラテン語ではこの階程を經て語頭に於て摩擦音 f となり、アルメニヤ語等では氣音要素を失つて b となつたと説明し、音聲學的にも無理がない。この意味に於て吾人は Skt. bh : Gr. φ : Lat. f : Arm. Goth. etc. b により規定せられる共通礎音素を便宜上 bh で表はすのである。汎く印歐諸語に殘り、確實に原始印歐語の語彙に溯り得る類例を擧ぐれば、

Skt. bhrā́tā 'brother', Av. brātar-, Gr. φράτωρ 'member of a φράτρα', Lat. frāter 'brother', OIr. brāthir, Goth. broþar, OChSl. bratrŭ, Lith. broterė̃lis, Arm. ełbayr (łb<lł<br), Toch. A pracar, B procer.

*bh が母韻と母韻との間に挾まれた例を驗するに、

Skt. nábhaḥ 'sky, cloud,' Av. nabah-, Gr. νέφος, νεφέλη 'cloud,' Lat. nebula, OHG. nebul.

前例と異るところはラテン語がbを示すことで、*bh はその位置により、ラテン語に於て二様の變遷を經たことを知る。次に、

Skt. pitā́, Av. pitar-, Arm. hayr, Gr. πατήρ, Lat. pater, OIr. athir, Goth. fadar, Toch. A pācar, B pācer.

の如き例を集めて Skt. etc. p : Arm. h (w between vowels) : Goth. f なる相應を認定し、基礎音素を無聲唇破裂音と假定してpを以つて表記する事とすれば、原始印歐語は唇破裂音としてbh及びpで書き示される音素をもつてゐた事となる。近代語は普通pに對する有聲音bをも有してゐるが、比較研究の示す限り原始印歐語に於てbは比較的稀な音で、殊に語頭に於て稀有であつたらしい。確實な語源として*bを假定し得る例は少いが、その存在は次の例によつて疑ふ事は出來ぬ。

Skt. bálam 'power,' Lat. dē-bilis 'weak,' OIr. ad-bal 'powerful,' OChSl. bolĭjĭ 'greater,' Gr. βέλτερος 'better.'

Lith. trobà 'house,' Lat. trabs, trabēs 'balk,' Oscan trííbúm 'house,' OWelsh treb 'abode.'

又アルメニヤ語及びゴート語に關しては、

Arm. stēp 'frequent,' stipem 'I press' : Gr. στείβω 'I tread, march,' στιβαρός 'pressed.'

Goth. diups 'deep' : Lith. dubùs 'deep'.

を比較して Skt. etc. b : Arm. Goth. p なる相應を得る。最後に

Skt. phūtkaraḥ 'blowing', Gr. φῦσα 'breath,' Arm. phukh

の比較は Skt. ph : Gr. φ (=ph) : Grm. ph なる相應を示し、前記の三列中何れとも合致しない故、原始印歐語に更に第四種の唇破裂音を假定して ph を以つて之を表はす。但し他の國語に於ては *p の相應と區別なく(Lith. pūsti 'to blow')、又 ph を保有する國語も傍形として單なる p を示す事があり(Skt. pūtkaroti 'to brlow' = phūtkaroti)、確實な語源の資料は甚だ少い。*ph の如き無聲帶氣破裂音は原始印歐語に於て感動表現に用ひられた場合があると考へられてゐる。

以上を要するに原始印歐語の音組織の一部として唇破裂音 *p *ph *b *bh の一列を推定した事になるが、同様な方法と考察とにより齒音・口蓋音・喉唇音・喉音を推定し、原始印歐語の破裂音の組織を設立する。

1. 唇　音 (Labials):	p,	ph,	b,	bh
2. 齒　音 (Dentals):	t,	th,	d,	dh
3. 口蓋音 (Palatals):	k̂,	k̂h,	ĝ,	ĝh
4. 喉唇音 (Labio-velars):	q^u,	$q^u h$	g^u,	$g^u h$,
5. 喉　音 (Velars):	q,	qh,	g,	gh

然し第三乃至第五の三列を完全に區別する國語はなく、あるものは第五列と第三列とを區別せず、あるものは第五列と第四列とを區別しない。且つ第五列に關しては學者の意見も一致してゐないから、以下說明

を簡單にするため第五列は考慮に入れぬ事とする。

さて各國語の相應を基礎音素に照して見る時、ゲルマン語に於ける破裂音の變遷は特に注目に價する。上例の示す所によれば則ち IE. p : Goth. f, IE. b : Goth. p, IE. bh : Goth. b となり、他のゲルマン語との比較によりこの變遷は原始ゲルマン語に溯る事を知る。齒音等も亦同様の變遷を示す故、原始印歐語の破裂音は原始ゲルマン語に於て規則正しき推移を遂げ、その結果ゲルマン語の單語はサンスクリット語、古代ギリシャ語等に比し風貌を一新した事が分る。音韻變化が單獨孤立の現象でなく、一定の發音傾向に指導せられる音組織の變革を意味する事を示す好適例であるから少しく詳細に説明して見る。

先づ例について示せば・

I. IE. voiceless explosives p, t, k̑, q^w > G. voiceless spirants f, þ, x, x^w

a. p>f(bilabial) : Skt. páśu 'cattle,' Lat. pecu : Goth. faíhu, OIc. fé, OE. feoh, OHG. fihu.

b. t>þ : Skt. tṛ́ṇam 'stalk of grass,' OChSl trŭnŭ 'thorn' : Goth. þaúrnus, OIc. OE. þorn.

c. k̑>x(>h) : Skt. śvā́ 'dog,' Gr. κύων : Goth. hunds, OIc. hundr, OE. hund, OHG. hunt.

d. g > x^w (>hw) : Lat. quod, 'what,' Skt. kataráḥ 'which of two,' Gr. πότερος : Goth. hva, OIc. hvat, OE. hwæt, OHG hwaʒ

II. IE. voiced explosives b, d, ĝ, g^w > G. voiceless explosives p, t, k, k^w

a. b > p : Lith. dubús 'deep' : Goth. diups, OIc. diupr, OE. déop.

b. d > t : Skt. dáśa 'ten,' Gr. δέκα, Lat. decem : Goth taíhun, OIc. tío, OE. tíen.

c. ĝ > k : Skt. jā́nu, 'knee,' Gr. γόνυ, Lat. genu : Goth. kniu, OIc. kniu, OIc. kné, OE. cnéo, OHG. kneo.

d. g^u > k : Gr. βίος life,' Lat. vīvus 'alive,' : Goth. qius, OIc. kvikr, OE. cwicu, OHG. quec.

III. IE. voiced aspirated explosives bh, dh, ĝh, g^uh > G. voiced explosives b, d, g, (g^u?), or ƀ, đ, ǥ, w between vowels.

a. bh > b : Skt. bhárāmi 'I bear', Gr. φέρω, Lat. ferō : Goth. baíran, OIc. bera, OE. OHG. beran (Inf.).

b. dh > d : Gr. θύρα (<*dhurā) 'door,' Lat. forās (<*dhuorā-) adv. 'out of doors': Goth. daúr, OE. dor, OHG. tor.

c. ĝh > g : Skt. haṃsáḥ 'goose,' Gr. χήν, Lat. (h)anser : OIc. gás, OE. gós, OHG. gans.

d. g^uh > w(between vowels) : Gr. νίφα acc. 'snow,' Lat. nix, acc. nivem, OIr. snige 'rain' : Goth. snáiws 'snow,' OE. snáw.

以上の音則は最初デンマルクの言語學者ラスク(Rasmus Rask)がその名著「アイスランド語起源論。コーペンハーゲン一八一八」(Undersögelse om de gamle Nordiske eller Islandske Sprogs Oprindelse) 中に發表したものであるが、後獨逸のグリム (Jacob Grimm) が有名なる「獨乙語文典」卷一(第二版一八二二)に於て修補繼承し、之を通じて一般學界に知られたが故に通常「グリムの法則」と稱せられてゐる。

ゲルマン語に於けるこの第一次子音推移(die erste Lautverschiebung)を音聲學的に考察するならば、一貫せる傾向として聲門部に於ける發音動作の弛緩を指摘する事が出來る。即ち無聲破裂音の閉鎖 (occlusion) に際して聲門の

閉遮が完全でなければ、子音の破裂（explosion）と之に續く母韻の聲帶振動との間に氣息の流出を釀し、所謂無聲帶氣破裂音を生ずる。而して無聲帶氣破裂音は單純なる無聲破裂音より、發音部位の緊張弱き（lenis）を常としてゐるから、一轉して容易に無聲摩擦音となる事が出來る(p > ph > f, etc)。次に有聲破裂音に伴ふ聲帶振動が不活潑となり破裂の瞬間に於て始めて起るとすれば、閉鎖の間は全く無聲である。かくて生ずる弱無聲破裂音はやがて普通の無聲破裂音に轉向する(b > p lenis > p fortis)。現代語に於てもフランス語・ロシヤ語の有聲破裂音と獨逸語・英語のそれとを比較して見れば、後者は前者に於ける程完全な帶聲作用（vocalization）を伴はぬのを知る。又獨逸語の方言中には弱無聲破裂音を有するものがあると云ふ。原始印歐語に於ける有聲帶氣破裂音の發音は正確でないが、一種の喉部發音を伴つた事は想像し得る。ゲルマン語は之を放棄したが、最初は尙帶氣作用(aspiration)を保存してゐたものらしく、少くも母韻の中間に於ては有聲摩擦音に變化してゐる(bh > b' > ƀ, b)。

かくの如く、比較文法も音韻變化の跡を單に機械的に列記するに滿足せず、常に音聲學的考察を施す必要がある。音韻變化は實に多種多樣であるとは云へ、その變化範圍は音聲學的性質によつて比較的限定されてゐるのである。又音韻變化は音組織の變化である故、pが變遷する時これと同種のtkも略同じ方向に變遷し、ptkが變化する時は之と對立するbdgも亦變化を蒙る事が多い。然し國語の音組織に大變革を來したゲルマン語子音推移の原因を奈邊に求むべきかは未だ明瞭でない。換言すれば、如何なる原因により從來の發音習慣と異る發音傾向を誘發したかは、比較文法の方法によつては知り得ない所である。多くの學者は征服移住による國語變換を原因と假定するが、不幸にして史實の徵すべきものなく、吾人は啻その可能性を認めるに止めておく。

所謂グリムの法則も決して無條件的ではなく、仔細に調査すれば幾多の例外に逢着する。その例外のよつて生ずる條件を明にし、グリムの法則を補足した音則中最も有名なのはグラスマンの法則(H. Grassmann, Kuhns Zeitschrift XII 1863, pp. 81—110 : über die aspiraten und ihr gleichzeitiges vorhandensein im an- und auslaute der wurzeln ; ib. 110—138 : über das ursprüngliche vorhandensein von wurzeln, deren anlaut und auslaut eine aspirate enthielt) 及びヴェルネルの法則(Karl Verner, Kuhns Zeitschrift XXIII. 1877, pp. 97—138 : Eine ausnahme der ersten lautverschiebung, written : Carthaus bei Danzig, am 31. august 1875) であるが、その通用範圍が遙に廣く、且つ比較文法の發達に偉大なる貢獻をなした後者につき一言する。この音則は原始ゲルマン語の f, þ, χ, χ^{w}, s が一定の條件に於て夫々 ƀ, đ, ǥ, w (<g^{w}), z となる事を規定したもので、その最も確實に適用される場合は、原始ゲルマン語に於て f 等が第一音節の母韻要素の直後にあつて有聲音に續かれ、然も第一音節に原始印歐語から繼承したアクセントなき時である。即ち *faþér の如き形式を具備する時、その þ は d に變化したと云ふのである。一例を擧げれば Skt. bhrā́tā : Goth. broþar に對し一見類似の條件を備へる Skt. pitā́ が Goth. fadar に相應し、IE. t : Skt. t : Goth. þ なる音則を破るが如く見ゆるのは、アクセントの位置の相違に由來するものなることを明にしたのである。これにより原始ゲルマン語に於て第一音節のアクセントは摩擦音の有聲化を防ぐ力ありしを訓へ、アクセントの位置が音韻變化の條件として重要な事を知らしめた。尙ヴェルネルの音則はグリムの音則を補修したに止らず、原始印歐語のアクセント(pitch-accent)が原始ゲルマン語に尙繼續されてゐた事を間接に證明し、且つ一見不規則に見ゆる例外も、細心なる研究により、一定の條件を發見して説明され得べき事を明示した。

言語は時代により比較的安定なる場合と、著しく不安定なる場合とがあり、變遷の程度は年月と正比例するものでない。第一次子音推移の結果大變革を受けた原始ゲルマン語の音組織は各ゲルマン語に於て更に變遷を續けたが、その内特に高地獨乙語 (High German) は第二次子音推移(die zweite Lautverschiebung) を起して、他のゲルマン諸語のみならず、低地獨乙語(Low German)と區別される顯著な特徴を殘した。第二次子音推移の範圍は方言により、時代によつて異つてゐるが、最も廣汎に行はれたのは、p t k の蒙つた變化で(西暦一—八世紀)、語中に於ける位置に從ひ二樣の結果を齎してゐる。英語と獨乙語とを比較すれば容易にその差異を認め得る。

	a. 語頭及び子音の後	b. 母韻の後
1. G. p > OHG.	pf	ff
2. 〃 t > 〃	z(=ts)	ʒʒ
3. 〃 k > 〃	k(Uper German ch=kch)	hh

例 1. NE. path : NHG. Pfad　　NE. open : NHG. offen

tongue : Zunge　　eat : essen

knee : Knie　　speak : sprechen

尙この外現今の標準文章語の見地から注意すべきは齒音の推移である。例へば、

G. d > OHG t:　NE. daughter : NHG. Tochter

þ > d:　three : drei

かゝる二段の子音推移を經ても現今の標準獨乙語の音組織は依然として p t k b d g を含み、一見原始印歐語或は原始ゲルマン語の音組織に似てゐるが、各音素をその起源につき検討する時、IE. t, d, dh は夫々 NHG. d, z(ts), t に相當するのを知る。これによつても時所を異にする國語の單語を比較するに嚴密なる音則を背景とせず、徒に一般的類似を基礎として比較する語源論の如何に危險なるかゞ分る。英語 bad を直ちに同義なるペルシャ語 bad と比較し、ギリシャ語 *ποταμος* を同じく川を意味する北米の一方言 potomac と比較する如きは、比較研究法の斷じて許さぬ所である。

上述の如く子音の推移と云ふ事は發音傾向の推移に基く音組織の變化と考へ得る故、決してゲルマン語特有のものではない。これと同様な事はアルメニヤ語にも起つた。その結果を簡單に表示すれば、

IE	p, t, q^u	: Arm.	h(w), th, kh
	ph, th, q^uh		ph, th, x
	b, d, g^u		p, t, k
	bh, dh, g^uh		b, d, g(ǰ, ž)

兩語の子音推移を比較して最興味あるは、原始印歐語の無聲破裂音が、アルメニヤ語に於ては一部無聲帶氣破裂音を以つて代表せられ、ゲルマン語に於ける摩擦音もこの階程を經た事を指示してゐる點である。この外古代アイルランド語に起つた摩擦音化の現象、トカラ語に起つた無聲音化の現象も一種の破裂音推移と稱して差支へない。直接に比較の對象とならずとも、諸國語に類似の現象が起つた事、又起り得る事は比較文法の大いに注意すべき所である。

研究の進歩につれ共通基礎語の音組織に對する觀念も變更するのは當然である。原始印歐語の母韻組織研究の歴史はよくこの消息を物語つてゐる。印歐語比較文法の初期に於ては、サンスクリット語を過重した結果、原始印歐語の基礎母韻としてa i uを認めた。然しサンスクリット語のaはギリシャ語・ラテン語等のaに相應するのみならず屡々e及びoにも相應すると云ふ事實、並にサンスクリット語aの前には喉音kのみならず口蓋音cも現はれ、且つこの場合そのaは屡々歐洲語のeに相應すると云ふ事實は、特別な説明を要求した。十九世紀の後半に至り、その解答は期せずして諸方の學者より提唱せられた。卽ち、

Skt. ca 'and', Av. ča : Lat. que, Gr. τε ; Skt. páñca 'five', Av. panca : Lat. quinque, Gr. πέντε

等に於て、サンスクリット語のcはその後の母韻の口蓋音化作用の結果生じたものと推定せられ、その母韻は原始インド・イラン語に於ては尙口蓋母韻 (palatal vowel) であつたに相違ない事が判明し、ギリシャ語等歐洲語の指示に從つて原始印歐語にe母韻の存在した事が認知された。これにより少くも母韻に關する限り、ギリシャ語等の歐洲語はインド・イラン語に勝つてゐる事が一般に承認されるに至つた。尙單に他國語との比較のみによらず、インド・イラン語自身の音韻變化が a:Gr. ε と a:Gr. α, ο との區別を示した事は大いに注目すべき點で、比較文法は先づ各國語或は或各語派につき、その基礎音形を推定し、而して後諸語派を相互に比較すべき事を訓へてゐる。

又原始印歐語に於けるoの存在も、ギリシャ語・ラテン語・ケルト語・アルメニヤ語の一致して支持する所で、殆んど疑を容れないが、その存在をインド・イラン語自身につき證明せんとする試も行はれた。然しこの所謂「ブルグマンの方則」は一般の承認する所とならず、且つ後年提唱者自身も之を撤回してゐるから、茲には略す。

吾人は原始印歐語の短母韻として a e o i u を推定し得たが、比較研究の結果は更に他の弱母韻を要求した。卽ち

Skt. pitā́ 'father' Av. pitar-: Gr. πατήρ, Lat. pater, Goth. fadar;

Skt. sthitáḥ 'standing': Gr. στατός, Lat. status, Goth. staþs 'place'.

等は Skt. i, Av. i: Gr. etc. a なる相應を示し、既知の如何なる短母韻もこの相應を滿足に說明し得ない。よつて a でも i でもない一種の母韻が原始印歐語に存在した事を推定し、尙他の音韻的事實を參照してその音の性質を考へ、音色は明確に決定し得ないが、この弱母韻を ə と假定し、ヘブライ語文法の術語を借りてシュワ (schwa indogermanicum) と呼んでゐる。更に、

a) Lat. quattuor 'four', Hom. πίσυρες (Attic τέτταρες): Lith. keturì, OChSl. četyre, Goth. fidwor, Skt. catvā́raḥ. Arm. tasn 'ten', OHG. zwein-zug 'twenty': Gr. δέκα, Lat. decem etc.

b) Gr. νύξ 'night': Lat. nox, OChSl. nošti, Lith. naktis, Goth. nahts.

の樣な場合には、その共通基礎音を e としても o としても滿足な說明は得られない。近時、かゝる相應に對して、第二シュワ (schwa secundum) を假定して ə^{2} なる記號を用ひる。印歐語比較文法で重大な役目を演ずる母韻交迭の組織 (Ablautsystem) に於て、ə が長母韻の ā ē ō の弱化音を代表するに對し、ə^{2} は短母韻 a e o の弱化したものと認められてゐる。

かくの如く研究の進步は益々吾人の認識力を增進し、共通基礎語に對する觀念を精細ならしめるものであるが、更に假定の度を增し、直接比較によつて得られる範圍を越える事は普通の場合危險を伴ふが、眞個の學術的態度を以つ

て行はれるならばそれも亦妨げない。最近の一例としてポーランドの言語學者クルュロウィッチ (I. Kurylowicz) の學說を擧げる事が出來る。之は嘗てドゥ・ソシュール (F. de Saussure: Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes 1879, p. 135 sqq.) によつて提唱された學說に立脚し、これを敷衍補修して三種の子音的 ə を假定し、これにより印歐語比較文法の謎を解かんとするもので、その硏究結果は種々な點に於て注目に價するが、未だ一般的贊成を獲ち得るには至らない。その概要については Actes du premier congrès international de linguistes, Leiden 1928, p. 111—113 を參照せられたい。

以上共通基礎語の音組織を決定する爲には比較によつて一音素づゝ推定してゆく事を例示した。文法組織の推定方法も原則的には何等の變りもない。印歐語の如き屈折語にあつては、名詞の格語尾、動詞の人稱語尾、語幹構成に必要なる接尾要素、語幹の形式、更に意味上の樣子をなす語根等各々比較によつて再現出を試み、その結果を綜合して共通基礎語の組織の概要を窺ふ事とする。例へば、

a) Skt. ávi-s 'sheep', Lat. ovi-s, Gr. ὄϊ-ς, Lith. avì-s; Lat. hosti-s 'stranger,' Old Norse gasti-R 'guest,' OIc. gestr, Goth. gast-s (Prim. G. -i-s).

b) Skt, sūnú-s 'son', Lith. sūnù-s, Goth. sunu-s, OIc. sunr, ; Skt. bāhú-s 'arm,' Av. bāzu-š, Gr. πῆχυ-ς ; Lat. manu-s 'hand.'

を比較し、Skt. -s, Gr. -s etc. : IE. -s なる音相應を參考として、原始印歐語に於ては、i 語幹及び u 語幹の主格語尾 (Nominative ending) に、-s を用ひたのを知る。又

Skt. ás-ti 'is,' Av. as-ti, Gr. ἔσ-τι, OLith. es-ti, ORuss. jes-tĭ, Lat. es-t, OIr. is, Goth. is-t を比較し、個々の音相應及び各國語に於ける音韻變化を參酌して、IE. *es-ti を推定し、第二種變化(athematic conjugation)三人稱單數現在形の語尾 -ti を抽象する事が出來る。上例に於て人稱語尾を除去した後に殘る部分は更に分解を許さない。故にこの場合は何等の接尾要素の介在なく、語根に直接人稱語尾が添加されたのを知り、且つ原始印歐語の一語根 es を抽象し得るのである。一群の單語に共通し、その意義の連絡を保つ要素としての語根はあくまで文法上の存在で、獨立語と混同してはならぬが、研究の便宜上比較文法は出來得る限り共通基礎語の語根を推定し、無數の單語を比較的少數な中核要素の項下に攝收せんと試る。この方法を採用して成れる印歐語比較辭典もある。

上例 *esti に於ては直ちに單語の全貌を再現出したが、之は特殊な語形についてのみ許さるべき事で、一般には多大の警戒を要する。何となれば Lat. est : pl. sunt, Goth. ist : sind の示す如く、この動詞は多くの印歐語に於て全く特別な變化をなすものと見なされ、その特異點の一致相應は共通基礎語の特徴を忠實に繼承するものと考へねば說明できぬ。故に IE. *esti : pl. *senti (or *sonti)の如き再現出には充分な確實性が伴ふ。しかし諸國語に於て普通な變化形式に屬する單語にあつてはかく簡單に考へ得ぬ理由がある。言語は常に規則化・一般化の傾向をもつてゐるから、比較的少數の例外を除き、共通基礎語の複雜な變化は各國語に於ける所謂規則變化に融合されて了ふ。故に例へ數國語の一致があつても單語の全貌を再現出するには細心の注意を拂ひ、その單語が各國語の文法組織に對して示す特異性に着眼せねばならぬ。かゝる特異性の一致は、諸國語相互の借用關係に依らぬ限り、通常共通基礎語に溯り得るものである。再現出形を同價値と認めることが誤謬の根源で、常に再現出に使用した資料を檢討吟味して、その

結果の確實性の多寡を評價する必要がある。故に時としては一語派の共通基礎形の再現出に滿足し、時としては一國語の最古形の推定に滿足せねばならぬ。尙この問題に關聯しては共通基礎語の方言的區分を考慮せねばならぬ(第四章參照)。

最後に比較文法は共通基礎語の格・時・法等、變化形の意義用法をも推定し、文章の構造・種類を研究する任務がある。この場合に於てもその方法は常に比較に終始するのは勿論で、比較文法のこの部分は普通比較文章論(comparative syntax)と稱せられる。

第四章　共通基礎語

ある國語が相當廣い地域に擴つて使用される場合は多少なり方言的區分の生ずる事は、分化と統制とを繰返す言語としては當然なる現象である。比較文法が推定する共通基礎語にも亦方言的區別のあり得た事は想像に難くない。印歐語比較文法の推定する原始印歐語に方言的區分の存した事は比較研究の明示する所である。即ち原始印歐語も決して統一的なものでなく、方言的特徵の境界線(isogloss-line)が縱橫に交錯してゐたものと考ふべきである。今最も顯著な一例として三音列

IE. a) k̑,　k̑h,　ĝ,　ĝh,

b) q^u,　q^uh,　g^u,　g^uh,

c) q,　qh,　g,　gh.　(二四頁參照)

の變遷を擧げる事が出來る。インド・イラン語派・アルメニヤ語派・アルバニヤ語派・スラブ語派・バルト語派に於ては、a列の音を歯音(sibilant, s, z, š, ž etc.)或は半破裂音(semi-explosive, ts, dž, dz, etc.)の類によつて代表し、b及びc列を單純なる喉破裂音或はそれから轉化した音によつて代表するに反し、ギリシャ語派・イタリヤ語派・ケルト語派・ゲルマン語派に於てはa及びc列を喉破裂音或はそれから轉化した音によつて代表し、b列の特徴たる唇部發音は保存されてゐる。

a) I. Skt. śatám 'hundred', Av. satəm, OChSl. sŭto, Lith. szim̃tas ;

II. Gr. ἑκατόν, Lat. centum, OIr. cét, Goth. hunda(pl.).

b) I, Skt. catvā́raḥ 'four', Av. čaϑwar-, Arm. čorkh, OChSl. četyre, Lith. keturì, (c, č > k) ;

II. Hom. πίσυρες (Attic τέτταρες), Lat. quattuor, OWelsh petquar (OIr. cethir), Goth. fidwor.

c) I. Skt. kravíḥ 'flesh', Av. xrū-, OChSl. krŭvĭ'blood,'Lith. kraũjas ;

II. Gr. κρέας 'flesh', Lat. cruor 'blood,' OIr. crú, OIc. hrár 'raw'.

a列に於ける相應を標準として第一類の國語をサタム語（Av. satəm)と稱し、第二類の國語をケントゥム語（Lat. centum)と云ふ。以上により例へ原始印歐語のある時代には三音列の區別があつたとしても、比較によつて直接到達し得る狀態にあつては明瞭に方言的區分を生じ、サタム語區域に於てもケントゥム語區域に於ても各々二音列を有してゐたに過ぎない。卽ち前者に於ては、k′列(=k̑列)とk列(qᵘ列とq列とを含む)とが區別され、後者に於てはk列(k̑列とq列とを含む)とqᵘ列とが區別されてゐたのである。k′の音價は明確に示し得ないが、摩擦音と云ふより寧ろ

強く口蓋音化された破裂音と見る方が適當と思はれる。新に中央アジヤから發見されたトカラ語はａ列を代表するにｋを以つてする點はケントゥム語に似てゐるが、ｂ列をもｋで代表する事が多いのでその所屬に一抹の疑惑がある。

a. Tokh. A känt, B känte 'hundred' : Lat. centum.

b. Tokh. A ak, B ek 'eye' : Lat. oculus, Gr. ὄσσε 'eyes' (ὄπωπα 'I have seen,' ὄψομαι 'I shall see,' *√oqʷ).

但し Tokh. A kukäl, B kokale 'wheel' : Gr. κύκλος, OE. hwēol の如き場合に脣部發音の名殘を見出すと云ふ說が正しければ、トカラ語は明瞭にケントゥム語である。之に對し小アジヤから發見されたヒッタイト語はケントゥム語と斷定すべき二種の特徵を具備してゐる。

a. Hitt. kardiaš 'of the heart', kardi 'to the heart' : Lith. szirdis 'heart', Gr. καρδία, Lat. cor.

b. Hitt. kuenzi 'he kills' : Skt. hanti, ghnanti, (pl.), Gr. φόνος 'killing', θείνω 'I strike' (*√gʷhen).

尙方言的特徵の例を他に求めれば、*a と *o との混同はインド・イラン語派・アルバニヤ語派・スラブ語派・バルト語派・ゲルマン語派に起り、他の語派は兩音素を區別してゐる。この場合ケントゥム語たるゲルマン語派が第一類に屬し、サタム語たるアルメニヤ語が却つて第二類に屬してゐる點に注目すべきである。又サタム語中でも*əは一般に*a と運命を共にしてゐるに反し、インド・イラン語派のみはｉによつて之を代表してゐる。ケントゥム語中、ｏ語幹の單數所屬格の語尾にｉを示すのはイタリヤ語派とケルト語派のみで、兩語派の特別密接な關係を示す有力な一致點である。勿論數語派に共通な現象の內、各語派が獨立に發達させ只その結果に於てのみ一致してゐるものもあり得るが、共通時代に溯ると思はれるものも少くなく、吾人が比較硏究によつて直接推定する原始印歐語は方言的に區分せ

られてゐた事を忘れてはならぬ。故に各代表語を比較して直ちに共通基礎語の統一的音組織或は文法形態に溯り得るものと考へる事は、方法上の飛躍を犯してゐる次第で、嚴格に云へば原始印歐語領域内に於ける各語派の基礎形、或は諸語派に共通する方言的基礎形を推定し、もし出來得ればそれより進んで共通基礎形を假定するものと考ふべきである。比較によつて推定する再現出形は常に假定に止るとは云へ、なるべくならば單なる便宜的記號の域を脱して、略正確な近似性をも與へる樣に愼重な態度を以つて研究に臨まねばならぬ。例へば上例に於て k' と k との二音列をもつ方言區域と k と q^u との二音列をもつ方言區域とを推定する事は、比較研究の直接結果であるが、更に進んで k q^u q の三列を假定する以上、それは單に Skt. kravíh : Gr. κρέας の如き場合を説明する便宜的手段たるに止らず、原始印歐語の歴史的變遷過程の説明をも含んでゐるものでなくてはならぬ。

以上の如く共通基礎語にも方言的區分を考へ得る事は當然であるが、かゝる方言的差異を基礎として同時に多數の語派に分裂したと考へるのは不自然である。卽ち各語派が共通基礎語から分派した年代にも早晩の相違があつた事を認めねばならぬ。Ａ語派は頗る早く共通基礎語から分派し、次にＢ及びＣ語派の分派が起り、更に遲れてＤＥ等の語派が順次に分派し、こゝに始めて共通基礎語の解消を來したものと考へるのが妥當である。換言すれば吾人が共通基礎語と稱するものには、幾多の方言的差異を認定し得るのみならず、時間的にも數層の階程を豫想せねばならぬ。ＡＢＣ語派が夫々分派した後にも共通基礎語は尙その變遷を持續したのは勿論であるが、ＡＢＣ語派はその變化に與らず、ＡＢＣ語派の一致して示す特徴はＤ等の語派には見出されず、或は稀有の例外としてのみ保存されてゐるかも知れぬ。從つてＤＥＦ語派の一致によつて再現出した形はＡＢＣ語派に適用せられず、又ＧＨＩ語派のみによつて再現

出した形とも異り得る。原則として共通基礎語の古い語形は早く之から分離した語派に求め得る事となり、ある語派に殘る特殊な不規則形式はある時代に於ける共通基礎語の有力なる一形式を代表する事も起り得る。但し具體的事實としては通常何れの語派が他の語派より早く共通基礎語から分離したかを示す歴史的證據を發見し得ぬ。故に比較文法の見地からはかゝる古風の不規則形を多量に含む語派は早く分離したものと假定する。之を印歐語族について見るならば、ヒッタイト語・インド・イラン語派・トカラ語・アルメニヤ語・イタリヤ語派・ケルト語派は他の語派より比較的早く原始印歐語から分派したらしく、之等の語派に所謂 r 人稱語尾が保存されてゐる事は興味ある點である。又有史時代に於ける地理的分布狀態をも考慮して之等を邊境語(marginal languages)と稱し、他を中央語 (central languages)と呼ぶ事もある。

かゝる研究の方向を愼重に進めて行く時は共通基礎語の變遷の片鱗を窺ひ、不規則なる特殊形に說明を與へ得るのみならず、一般に流布する見解に改訂を促す事がある。例へば動詞第一種變化(thematic conjugation)の現在單數の形式は比較により通常

1. *bherō, 2. *bhere-si, 3. *bhere-ti

と推定せられてゐるが、ラテン語は

1. ferō, 2. fers, 3. fert, (1. pl. ferimus, 2. pl. fertis)

を呈し、正規なる變化形式に背馳する所に、原始印歐語の古形式を偲ばしめるものがある。果して印度最古の文獻には三人稱單數の不規則形 bhárti があり、ギリシャ語のホメール詩中には孤立形 φέρτε が見出される。即ちこの場

合ラテン語の示す如く、單數二人稱・三人稱及び複數二人稱にあつては語根と語尾との間にeを挾まぬ變化形式が、原始印歐語のある時代に行はれた事を推定せしめる。尙詳しくは A. Meillet, Bulletin de la Soc. ling. de Paris xxxii. p. 1—28, p. 194—203, 1931 を參照せられたい。

單語の全貌を再現出する事の困難は既に之を述べた。その全貌は再現出し得ずとも、語根・語幹の一致により共通基礎語の語彙の範圍を決定する事は理論的に許されてゐる。然し之を基礎とし更に進んで當時の社會制度・文化狀態・神話宗敎等を考察し、或は動植物・天候等に關する知識から共通基礎語を語つた民族の原住地をも推定せんとする事は比較文法の直接任務ではない。かく言語的資料によつて往古の文化狀態を研究する部門は特に言語古物學(linguistic palaeontology)と呼ばれてゐる。この研究は屢〻民族學・考古學と接觸し、且つ實際問題としては幾多の困難に遭遇し、稍もすれば主觀的獨斷に陷る恐れがある。單語は音形の變化のみならず、意義の變遷を經る爲、外形的並に內容的變化が各單語の複雜なる歷史を形成し、音形・意義を二つながら滿足させる語源は容易に得られない。各國語間に於ける單語の借用は頻繁に起るものであるが、往古に於ける借用關係は槪して不明瞭で、音韻上明確な反證なき限り、本來の語彙と借用語とは區別され得ない。且つ單語の意義の變遷は心理的要素を多分に含み、社會構成の變移・文化狀態の進展に伴ふ事が多い。これ等の事情は語義研究をして益〻困難ならしめ、單なる抽象によつて根本意義を決定し、或は後世の意義に準據して共通基礎語の文化狀態に肉薄せんとする企圖の危險を指示してゐるものと云ひ得る。特に文化要素を表はす單語の歷史的研究は、出來得る限り事物に卽して行はれなくてはならぬと主張される所以である。又一方音韻變化の規則性にも充分なる注意を拂ひ、且つ言語意義論の敎へる意義變遷の一般原則をも參考す

べきは勿論である。

文獻豐富なる國語につき、單語の意義變遷の跡を辿り、之を文化研究の資料に充つる事は比較的確實な結果に導き得るが、文獻を絕した假定的共通基礎語に之を施す時はその結論も亦曖昧となるのは避け難い所である。

今例を印歐語にとれば、各語派を通じ、親族關係を示す單語で語源を共通にするものが少くない。その結果を綜合すれば男子を中心とする大家族制度の行はれたのを察知せしめる。興味ある事實として、「夫」を意味する語が同時に「家長」にも適用されてゐる。

Skt. pátiḥ 'husband, master,' (dám-patiḥ 'chief of the house'), Av. paitiš, Gr. πόσις 'husband', (δεσ-πότης),

Lith. patis, (vësz-patis), Tokh. A pats, Goth. brūþ-faþs 'bridegroom'.

宗教的方面に關しては神を意味する語が「輝く」を意味する語根から出てゐる事に注意したい。

Skt. devâḥ, Lith. dẽvas, Lat. deus, OIr. día, OIc. tívar, etc.

アヴェスタ語で daēva- が「惡魔」を意味するに至つたのは特殊な宗教的事情に基くもので、尙語源を共通にするSkt. dyáuḥ 'heaven, day' 又は pitā́ dyáuḥ 'Father Heaven' は天神として崇拜せられ、ギリシャ語の Ζεύς ラテン語の Juppiter (= Ζεῦ πάτερ) に相當する。一見類似せるギリシャ語の θεός 'god' は周知の音則に反する故こゝに屬する事は出來ず、且つ滿足な語源は知られてゐない。

動物の名殊に家畜の名には數國語間に一致を見るものがある。最もよく知られてゐるものに牛・羊・山羊・馬・犬等がある。一例を擧げれば、

Skt. áśvaḥ 'horse,' Av. aspō, Lat. equus, OIr. ech, OE. eoh, Gr. ἵππος, Tokh. A yuk, B yakwe.

元來原始印歐語では動物の雌雄を分つに別語を用ひず、必要あれば代名詞或は形容形の女性形を附加して之を區別したが、後諸國語は牝を表はすに特に女性形を造つた。かくて牝馬を表はす Skt. áśvā, Lat. equā, Lith. aszvà ができたのである。又 OIr. bó, Arm. kov, OE cú, Lettic gùws, Tokh. A ko は牝牛を表はすが全く同語源の Skt. gáuḥ, Av. gāuš, Gr. βοῦς, Lat. bōs (from Umbrian-Samnite), は牡牛をも牝牛をも表はし得て原始印歐語の狀態に近い。

次に植物名は動物名程正確には分らない。移住地に於て本來の名稱を類似の植物に轉用することが多い爲である。「山毛欅」を表はす Lat. fāgus (f.), OHG. buohha に對し、同音形の Gr φηγός (f.) は、「楢」の一種を意味する (Lat. quercus, OHG. forha)。故に印歐語の比較によつて得た植物名を基礎とし、植物學の知識により共通基礎語の地盤を地理的に制限せんとする企圖は種々なる障礙に妨げられてゐる。

動詞の語根の意義が正しく推定され得るならば共通基礎語時代の活動範圍、文化狀態の一斑を窺はしめるものと云へるが、比較によつて歸納した語根の意義は概して一般普通の動作に屬し、且つ意義の派生は複雜微妙である故、確實に特殊な職業等を推定するのは困難である。既に家畜名について一言し、之によつて當時牧畜の行はれたのは想像に難くないが、「搾乳」を意味する語根 (*√melĝ) も多數の語派に共通してゐる。

Gr. ἀμέλγω 'I milk', Lat mulgeō, MIr. bligim (< *mligim), mlicht, blicht, 'milk,' Goth. miluks 'milk,' OHG. melchan 'to milk,' miluh 'milk', OE. melcan, meolc, Lith. mélžu 'I milk', OChSl. mlězǫ, Alb. miel',

Tokh. A mälkune 'milking', malke 'milk', B malkwer.

但しインド・イラン語派に於てこの語根（Skt. mārṣṭi 'he wipes off, cleanses', Av. mərəzaiti）は、恐らく原義と思はれる廣義の拭淨動作のみを表はし、狹義化された搾乳の義を有しない。之を表はすには別の語根(Skt. √duh)を用ひ、この點に於て他の語派に對立してゐる。

かくの如くして原始印歐語或はその方言に屬したと推定せられる語根・語幹を列擧し、各項下に派生形を網羅せんとしたものにワルデ及びポコルニーの「印歐語比較辭典」がある。辭書は如何程浩瀚でもある意味では文典の附錄と考へ得られる故、比較辭典は印歐語比較文法の附錄とも考へ得る。然し大規模な比較辭典は比較文法によつて得たる知識の集大成とも稱すべきもので、比較文法の進歩は忽ち比較辭典に反映すべく、後者の各項が含む幾多の謎は解答を比較文法に迫つてその進歩を促す。但し辭書はその性質上單語の羅列に止る場合が多い故、共通基礎語の語彙研究に資せんとする時は、語根を出發點として各印歐語に於ける派生語の構造・意義を檢討し、或は動物・植物・鑛物等幾多の部門に分類して同を集め異を分つて音韻的並に意義的に確實な研究を企てねばならぬ。

第五章　研究の歴史

第一章に於て印歐語族の包含する語派並にその代表的國語を列擧したが、如何なる國語がこの語族に屬してゐるかを決定した事が既に比較文法の顯著なる功績で、決して一朝一夕に解決されたものではない。且つこの語族に屬する國語を數個の語派に分類し、語派相互の關係をも決定するには長日月の研究を必要とした。

そもそも十九世紀に於ける言語學の勃興は、印歐語研究と密接な關係を有し、その初期に於ては主として印歐語の研究に終始したのであるが、十九世紀の後半に至り印歐語比較文法の基礎も次第に鞏固となり、言語學の領野も擴張され、各部門の分化も明瞭となり、遂に今日の隆盛を致す因となつたのである。

研究史に關しては小林淳男氏の「言語學史」に詳述されてゐる故こゝには省き、唯サンスクリット語の研究が印歐語比較文法の發達を促し、印歐語比較文法の進歩につれ次第にサンスクリット語過重の弊を脱し、一方音則・類推等、言語研究の指導原理に對する正確なる理解に達した事を注意すればよい。尙前章に於て研究史に屬する事項にも論及した點があるから、茲では最近の發見にかゝるトカラ語が、如何にして印歐語族中にその位置を與へられたかを略述し、次いでヒッタイト語にも瞥見を與へる事とする。

〔一〕トカラ語の研究

十九世紀の終及び二十世紀の初に行はれた大規模な中亞發掘の結果、その豐富な收獲中に數種の未知の國語で書かれた寫本があつた。それ等の國語も次第に解讀せられその所屬も闡明されたが、殊に興味があるのはトカラ語で、その研究は最近印歐語學界の最も誇るに足る功績の一つである。

トカラ語の寫本は古代印度の一書體ブラーフミー文字で書かれてゐた爲、內容及び言語の所屬が明になる以前既に略明確な讀み方を知り得た事、又寫本中には、サンスクリット語よりの借用語を多量に含み、或はサンスクリット語の原文を載せてそのトカラ語譯を添へたものがあつた事は、その研究の進歩に頗る寄與する所があつた。

露・英・獨・佛及び日本の探險隊による組織的發掘研究に先だち、トカラ語寫本の斷片は一八九三年既にヘルンレ

(A. F. R. Hoernle) により學界に披露され、次いで一九〇一年、彼は醫藥書の斷片をローマ字に轉寫して發表した(Journal of the As. Soc. of Bengal 1901, part 1, extra number)。

又ロイマン (Ernst Leumann) は、一九〇〇年ロシヤの「ペトロウスキー蒐集」に屬する寫本二葉を詳細に研究してその內容の佛教文學に屬する事を看取し、未知の言語の解讀に努力した。

然しトカラ語研究に新時代を劃したのは、ジーク及びジーグリングの論文「トカラ語」(E. Sieg und W. Siegling: Tocharisch, die Sprache der Indoskythen. Berlin 1908)である。フート(Huth)、グリューンヴェーデル (Grünwedel) ルコック (Le Coq)に率いられた獨逸の探險隊により數次に伯林へ齎された豐富な資料により、隱忍自重數ケ年の研鑽の結果、この未知の國語は印歐語と決定せられ、然もインド・イラン語よりも寧ろ歐洲語に近く、母韻子音の組織、名詞動詞の變化及び語彙に關し明瞭に區別すべき二方言を含んでゐる事が斷定された。ジーク及びジーグリングはこの二方言を暫定的にA及びBと命名し、主としてA方言につき簡單に文法を敍述し、特に動詞變化、代名詞、數詞、親族名詞によつてその印歐語的性質を證明し、且つ先にヘルンレ及びロイマンにより發表された斷片はB方言に屬する事をも明にした。この論文一度出でてトカラ語が印歐語なる事は確定したが、名稱及び印歐語族中の位置等に關しては尙幾多の波瀾曲折を經、殊に前者に至つては未だに學者の意見は一致してゐない。

ロイマンは初め假りにカシュガル語と稱し(一九〇〇年)、次いで(一九〇七年)、彼が後年ノルトアーリシュ語(Nordarisch)と稱した「言語二」(實はイラン語派の一方言で今は Sakisch, Khotanese, iranien oriental 等稱せられるもの)に對し、「言語一」と呼んだが何等具體的命名には至らなかつた。

トカラ語なる名稱は元來獨逸の碩學ミュラーの提唱に基き(F. W. K. Müller : Beitrag zur genaueren Bestimmung der unbekannten Sprache Mittelasiens, Berlin 1907)、ジーク及びジーグリングにより繼承せられ、種々なる反對意見があつたに拘らず、獨逸の學者に採用され、又一般に印歐語學者の慣用する所となつたものである。命名の根據はA方言が回鶻人によりトフリ語(toxrï)と呼ばれたと云ふ見解に存する。但し之を直ちにインドスキチヤ人の言語と斷ずるのは早計である故、この點は固執されてゐない。トフリ卽ちギリシャ及びラテン文獻に、所謂トカリヤ人(*Τόχαροι*, Tochari, Thocari, 印度文獻の Tukhāra, 支那文獻の兜佉勒・吐呼羅・覩貨邏等)は、嘗つてオクソス河流域に勢力を揮つた民族であるが、寫本はタリム盆地の北邊より發見せられた事實、又A方言の使用者自身は自國語を ārśi-käntu 自國を ārśi-ype と稱してゐたと云ふ事實 (Sieg : Ein einheimischer Name für Toxrï, Berlin 1918)に關聯し、複雜なる論爭を誘發して各國碩學の蘊蓄を傾けしめ、東洋史に名高き月氏・大夏を中心として幾多の大膽なる假說を捲き起した。然しこの論戰に參加する爲にはギリシャ語及びラテン語の文獻のみならず支那の史書に精通するを要し、且つ西域史の造詣を必要とする故、單なる印歐語學者或は東洋學者の專門範圍を遙に凌駕するに至つた。玆には唯獨逸學者に對する有力なる反對として、かゝる問題を論議する資格に於て虧くる所なきフランスの大學匠シルヴァン・レヴィ(Sylvain Lévi)の見解を紹介するに止めておく。一九一三年、レヴィは廣く支那の歷史文獻を渉獵して、西曆前二世紀よりトルコ人の主權に屈服するまで約一千年に亙る龜玆國の歷史を拔粹し、巴里の「ペリオ蒐集」中よりB方言で書かれた隊商用木製旅劵を研究し、支那文獻に照して七世紀に屬する龜玆國の王名をその中に發見し、且つかゝる日常文書にB方言の使用せられてゐる事及び龜玆より發見された寫本にはA方言を用ひたものなき事を指

摘して、B方言を龜茲國の日常語と斷定し、これをクッチャ語即ち龜茲語(Kuchean, koutchéen)と呼ぶべき事を主張した(S. Lévi: Le "Tokharien B," langue de Koutcha, Paris 1913)。更に最近は同様支那史書に就き一千年に亙る焉耆(Karashar)及び高昌(Turfan)の歴史を辿り、文獻の證する限り何等トカリヤ人との關係を暗示するものなく、トルコ人の所謂トフリ語は別に之を求むべきを論じ、更に ārśi なる語は安西の轉化と説明し得となして、A方言は東方アールシ語或はカラシャール・トルファン語、B方言は西方アールシ語或はクッチャ語と命名するのが妥當だと結論してゐる(Le "Tokharien", Paris 1933)。

以上簡單に命名問題の經緯を述べたが比較文法の當面の問題としては、所謂トカラ語の印歐語族中に於ける位置を明確にして置かねばならない。

〔イ〕インド・イラン語派との關係

トカラ語がインド・イラン語派(=アリヤン語派)に屬してゐない事は既にジーク及びジーグリングの論文が明示する所である。故にロイマンも(一九〇八年)彼の所謂「言語二」をアリヤン語と認めたに對し「言語一」即トカラ語を非アリヤン語と稱してゐる。その證據としては次の諸點に留意すれば充分である。

〔一〕原始印歐語のe o aが混同されてゐない事。

IE. o = Indo-Ir. a.

Gr. δέκα 'ten', Skt. dáśa : Toch. A śäk, B śak.

Gr. πέντε 'five', Skt. pañca : Toch. A päñ, B piś.

Gr. φέρω 'I carry', Skt. bhárāmi : Toch. A pärtsi (Inf.).

Lat. sex. 'six', Goth. saíhs, Skt. ṣaṭ : Toch. A ṣäk, (B ṣkas).

IE. o = Indo-Ir. a

Gr. ὀκτώ 'eight', Skt. aṣṭáu : Toch. A okät, B okt.

Lat. oculus 'eye', Gr.. ὄσσε (dual) : Toch. A ak, dual aśäṃ, B eśane.

Gr. γόμφος 'nail', Skt. jámbhaḥ 'tooth' : Toch. A kam B keme.

Gr. πόσις 'busband,' Skt. pátiḥ : Toch. A pats

IE. a = Indo-Ir. a

Gr. ἄλλος 'another,' Lat. alius, Goth. aljis : Toch. A ālyak, B alyek, compare Skt. anyáḥ.

Gr. ἀργής 'white,' ἄργυρος 'silver,' Lat. argentun, Skt. árjunaḥ 'white' : Toch. A ārki 'white,' B ārkwi.

〔二〕 インド・イラン語に反し原始印歐語の ə は i にならなかつた事。

Skt. pitā́ 'father,' Gr. πατήρ : Toch. A pācar, B pācer.

Skt. duhitā́ 'daughter,' Gr. θυγάτηρ : Toch. A ckācar, B tkācer.

〔三〕 原始印歐語の ḱ 音及び qʷ 音に關しては三七頁參照。

〔四〕 語彙、「他」を意味するインド・イラン語は n を含むのを特徴としてゐるに對し(anya-)、トカラ語はヨーロッパ諸語と同樣に l を含んでゐる。第一項の例參照。

Toch. A sāle 'salt,' B sālyi : Lat. sāl, Goth. salt.

Toch. A por 'fire,' B puwar, pwār : Gr. πῦρ, OHG. fuir.

等もインド・イラン語に近くない事を示してゐる。

〔ロ〕イタロ・ケルト語派説。

地理的關係から見て最も近かるべきインド・イラン語派と疏縁なる以上、トカラ語に最も近い語派は他に求めねばならぬ。さてトカラ語の動詞變化を一見して直に目につく特徴は、その中相(middle voice)に於て人稱語尾がrで終つてゐる事である(上表參照)。

Sg.	1.	A -mār	B -mar
	2.	-tār	-tär
	3.	-tär	-tär
Pl.	1.	-mtär	-mntär
	2.	-cär	-tär
	3.	-ntär	-ntär

この特徴はイタリヤ語派及びケルト語派に著しいものである爲、有力なるケルト語學者ペーデルセン(H. Pedersen)をしてトカラ語は恐らくイタロ・ケルト語派に屬するものと考へしめ(一九一三年)、又ユンケル(Junker)の如く、トカリヤ人はケルト人だと主張する學者も出た(一九一五年)。然しこの見地から頗る詳細な研究を發表して、最も強くケルト語派説を主張したのはシャルペンティエル(J. Charpentier)であつた(Die ethnographische Stellung der Tocharer, Zeitschrift der Deut. Morgenl. Ges. 71, 1917, 348-388 ; Die verbalen r-Endungen der indogermanischen Sprachen, Uppsala 1917)。

蓋し中亞の一角から發見せられた印歐語が中相動詞にr人稱語尾を普及せしめてゐる事は頗る興味ある事には相違

ないが、所謂r語尾はイタリヤ語派及びケルト語派の獨占する所ではなく、インド・イラン語派にも殘存し、フリギヤ語(Phrygian)、アルメニヤ語、更にヒッタイト語にも求め得るのみならず、甚しく變化したトカラ語に於てその人稱語尾の原形を決定するには幾多の困難がある故、この類似を過重してトカラ語の所屬を決定するのは早計の譏を免れない。J. Vendryes: Les formes verbales en -R- du tokharien et de l'italo-celtique, Paris 1913 參照。

〔ハ〕フリギヤ・アルメニヤ語派說。

古來アルメニヤはフリギヤ人の植民地と傳へられ、アルメニヤ語とフリギヤ語とを同一語派に包括する學者も多いが、トカラ語とフリギヤ・アルメニヤ語を比較し、その類似點を十九項に亙つて詳論し、兩者の密接なる關係を力說した學者にポコルニーがある(J. Pokorny: Die Stellung des Tocharischen im Kreise der indogermanischen Sprachen, Wien 1919)。尙この傾向に屬する學者としては、フリギヤ語をアルメニヤ語及びトカラ語の中間に位するものと斷定したヘルマンを擧げる事ができる(E. Hermann: Kuhns Zeitschrift 50, 1922, S. 302ff.)。

然しポコルニー及びヘルマンが深大の學殖を傾注し、巧妙なる論法を使用して强調するともその學說は一般に承認せられず、トカラ語の所屬に關する最後の斷案とはならなかつた。

〔ニ〕獨立語派說。

最もよくトカラ語の實狀に卽し、穩健妥當な說で、フランスのメイエによつて提示されたものである(A. Meillet: Le tokharien, Indogerm. Jahrbuch I, pp. 1—19, 1914)。卽ちトカラ語を既知の一語派に含ませることなく、諸語派との親疏關係を考慮し、共通點を公平に評價して、イタロ・ケルト語派、アルメニヤ語派及びスラブ語派の中間に

位する獨立語派と認定する。イタロ・ケルト語派との共通點に關しては特に上述の r 語尾に注意すべく、又アルメニヤ語派及びスラブ語派に對しては特に l を含む分詞形に留意すべきである。OChSl. -lŭ, Arm. -eal, Toch. -l, -lle 參照。

かくの如くトカラ語に獨立語派の位置を與へる事により、印歐語族は新に一個の語派を增加し得た事となり、比較文法の收獲はイラン語派に屬するコータン語 (Khotanese = 'Nordarisch') 及びソグド語(Sogdian) の發見に於けるより一層大なるものがあつたと云へる。

トカラ語研究の結果として一二の興味ある點を擧げれば A cacäl 'he raised up' : B cāla の如き對立は Goth. haíhait 'he called' : OIc. hét, Goth. laílaik 'he leaped' : OIc. lék 等に比較され、ゲルマン語比較文法の一懸案に一道の光明を投じ(W. Schulze : Die reduplizierten Präterita des Tocharischen und des Germanischen, Berlin 1924)、B soyä, A se 'son' 及び B suwaṃ 'it rains,' swese 'rain', A swase は夫々ギリシャ語 υἱός 'son', ὕει 'it rains' に最も適當な類似形を提供した。更にヒッタイト語とすら共通する單語を指摘した學者もあるが (J. Friedrich Indogerm. Forschungen 46, p. 276, 1928 : Tokh. A kaṣt 'hunger' : Hitt. kašt; Tokh. A tkaṃ, B kaṃ 'earth : Hitt. tekan. 尙後者に對しては P. Kretschmer Glotta xx. pp. 65—67, 1931 參照)、トカラ語とヒッタイト語との間に特別な親緣關係ありと云ふ說(W. Peterson : Hittite and Tocharian, Language ix. pp. 12—34, 1933)は信ずる事が出來ない。

〔二〕ヒッタイト語の研究

トカラ語の發見とは別個の意味で印歐語比較文法に大影響を與へたのはヒッタイト語の發見である。一九〇六年獨逸のアッシリヤ學者フーゴー・ウィンクレル(Hugo Winkler)及び考古學者オットー・プーフシュタイン(Otto Puchstein)によつて小亞ボガスコイ(Boghazköi)附近に於て行はれた發掘の結果、往古小亞の中央、現今のカッパドキヤ地方に雄飛したハッチ王國の首府の廢墟から頗る豐富な公文書の蒐集が發見された。文字は楔形文字を使用し、言語はスメル語・バビロン語・アッシリヤ語の外未知の國語數種を含んでゐた。その內分量に於ても內容に關しても最も樞要なのはハッチ王國の支配者階級が公文書及び宗教的文書に使用した言語で粘土板上に刻まれ、西暦十五乃至十三世紀に溯り得ると云ふ。通常これをヒッタイト語と云ふ。然しハッチ國の一般人民の使用した眞のヒッタイト語卽ちハッチ語(Hattili)は別に存在してゐたので前者を擬ヒッタイト語と呼ぶ事もある(Pseudo-Hittite)。

一九一五年チェッコスロヴァキヤの言語學者ロズニー(Bedrich Hrozny)がヒッタイト語は印歐語であると發表して(Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft Nr. 58)、學界に一大センセイションを起して以來、諸國の學者の研鑽を經て次第に正確な知識を得るに至り、當初疑惑の眼を以つて見られてゐた印歐語說も今日に於ては學界の常識となつた。卽ち語彙に於ては印歐語的ならざる要素を多量に含んでゐるが、名詞・動詞の變化に於ては明に印歐語の特色を帶びてゐる。例へば

Nominative: antuhšaš 'man', šuppiš 'pure,' aššuš 'good',
Accusative: antuhšan, šuppin, aššun

に於ける語尾は夫々原始印歐語のo・i・u語幹の變化に髣髴たるものがある。又「水」を意味する中性名詞の變化は原始

印歐語の特徴ある變化形式を想起させる。即ち、

Nom.-Acc.: watar 'water' : cf. Skt. ū́dhar 'udder'

Genitive : watenaš : ū́dhnaḥ.

この形式をゲルマン語に求めるならば、

Nom. -Acc. (Goth. wato), OE. wæter, OHG. waʒʒar,

Gen. Goth. watins

によつて代表せられ、語源的にも一致する。

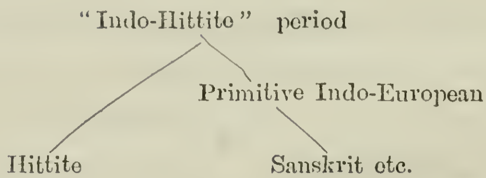
次に動詞の人稱語尾を揭げ、之をサンスクリット語の變化と比較する。

1st sg. -mi	Skt.	e-mi	'I go'
2nd -ši		e-ṣi	'thou goest'
3rd -zi		e-ti	'he goes'
3rd pl. -anzi		y-anti	'they go'

最後に關係・疑問代名詞の形も全く印歐語の面影を偲ばしめるものがある。

Nom. kuiš	:	Lat.	quis,
Acc. kuin	:		quem,
Neuter kuit (kuid) :			quid,

ヒッタイト語が印歐語たる事は疑なしとするも語族中に於けるその位置或は原始印歐語との關係は未だ明瞭でなく尙今後の研究に俟つべきものが多いが、恐らく既知の語派と同列に見るよりも、原始印歐語自身と同列に見る方が妥當だと考へられる。現時この說を最も明瞭に代表してゐるのはアメリカのスタートヴァント(E. H. Sturtevant: On the position of Hittite among the Indo-European languages, Language Ⅱ, pp. 25—34, 1926)で、その關係を圖解すれば次の如くなる。



尙ヒッタイト語と同時にボガズコイから發見されたルイ語(Luwian, Luili)はヒッタイト語に近きものと云はれ、又シリヤ及び小亞細亞にシリシヤ地方から發見された所謂「象形文字ヒッタイト語」(Hieroglyphic Hittite)も最近は有力な根據により上記の「楔形文字ヒッタイト語」に密接な關係ありと主張せらるるに至つた(B. Hrozny : Les inscriptions hittites hiéroglyphiques Praha-Paris-Leipzig 1933)。

* * * * *

最後に一言したいのは比較文法と文獻學との關係である。文獻學(Philology)が文獻の內容及びその傳承の由來を

攻究し、文獻を通じて文化の狀況をも探知せんとする以上、文獻の使用する言語自身を組織的に研究する文法と密接な關係にあるは自明の理である。文法も單に記述的に止るならば文獻學者自ら之を兼ね行ひ得るかも知れぬが、精密なる歷史文法、或は廣汎なる比較文法に至つては各國語或は語族の專門家を待つて初めてなし得る所である。研究の進步につれ現今は二國語を同時に專門とすることさへ容易でない故、到底文獻學と言語學とを等分に修得する事は望まれず、何れかに研究上の重點を置くべきは當然である。然らざれば却つて二兎を追ふ者となる恐れがある。近代言語學發達の初期に於て兩者は時に相反目したが次第に協調の必要が認められるに至つた。殊に古代ギリシャ語方言で書かれた碑文の研究、通俗ラテン語文獻の解說は印歐語比較文法の知識の有益なることを悟らしめるに與つて力がある。又印度最古の文獻リグ・ヴェーダの研究は最初比較文法と密接に關係したが、後には次第に文獻學的傾向を增して健全な發展を遂げてゐる。現代語のみを觀察する場合は文獻學に負ふ所比較的に少く、寧ろ方言地理學・實驗音聲學等に期待する事多きは當然であるが、主として古代語を資料とする印歐語比較文法等にあつては、文獻學の研究結果を顧慮せずして、健全なる完成は望まれない。又文獻學もその資料の內容を根本的に闡明せんとする時は、比較文法の教示を仰ぐべきである。學者の學術的分業が益〻多岐に至るは歡迎すべきも、これによつて言語學的研究と文獻學との間に溝渠をつくる事なく、兩者は車の兩輪の如く平行して進むと共に、一は常に他と協調し、互に相扶けて行路の難を凌がねばならぬ。

〔附錄〕　印歐語比較文法研究の參考書

過去約百年の間に印歐語比較文法は尨大な文獻をもつに至り，各國語の特殊な部分研究或は文獻學的色彩を帶びた書籍・論文をも併せれば實に充棟汗牛の感を深うするものがある。茲には斯學に志さんとする者の必讀書或は日常座右に備へて參考すべき基本的書籍若干を擧げるに止める。且つ各語派から初學者の先づ習得すべき代表語を選び，原則として歷史文法・比較文法の見地から著はされた單行本で英・獨・佛語で書かれたものに限り，部分部又は特殊な研究書は全て之を省いた。又往時の名著でも現今之に代る新刊書ある時は之を擧げず，比較的新しいものと雖，ことさら省いたものもある。各項下に於ける順序は學習者の便宜を顧慮し，なるべく易より難に，簡より繁に進む樣配列したが，他の事情を考慮に入れて順序を前後した事もある。素より不完全なるは著者の最もよく知る所であるが，こゝに列擧した書籍中には詳細な參考書目錄を含むものが多い故，更に精密な專門研究に進む者にも便宜を與へ得る事と思ふ。

I. 概說及び研究法。

1. B. Delbrück : Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen, ein Beitrag zur Geschichte und Methodik der vergleichenden Sprachforschung, 4. Aufl. Leipzig 1904.　「都 1934)
2. A. Meillet : La méthode comparative en linguistique historique, Oslo etc 1929. (邦譯 泉井久之助 京
3. A. meillet : Linguistique historique et linguistique générale, 2e éd. Paris 1926.
4. J. Schrijnen: Einführng in das Studium der indogermanischen Sprachwissenschaft mit besonderer Berücksichtigung der klassischen und germanischen Sprachen, übersetzt von W. Fischer, Heidelberg 1921. 〔the original : Handleiding bij de Studie der vergelijkende indogermaansche Taalwetenschap, Leiden 1917.〕

この外 III. 1 (chapitre premier : Méthode), III. 5 (Bd. I: Einleitung, Etymologie) 參照。尙一般的言語學概論の列擧は省く。

II. 印 歐 語 略 史。

1. P. Kretschmer : Die indogermanische Sprachwissenschaft, eine Einführung für die Schule, Göttingen 1925. ｢1924 pp. 19—79.
2. J. Vendryes : Langues indo-européennes = A. Meillet et M. Cohen : les langues du monde, Paris
3. E. Kieckers : Die Sprachstämme der Erde, Heidelberg 1931 pp, 4—16.
4. A. Meillet : Les langues dans l'Europe nouvelle, 2e éd. Paris 1928 pp. 15—45

この外 III に擧げた比較文法は皆序說に印歐語を列擧し長短の差こそあれ，歷史的概說を與へてゐる。

III. 印 歐 比 較 文 法。

1. A. Meillet : Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, 6e éd. Paris 1924. (German translation by W. Prinz : Einführung in die vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, Leipzig 1909.)

最も入門に適する良書であるが，之を補足するものとして A. Meillet: Les dialectes indo-européens, Paris 1908, nouveau tirage avec une introduction nouvelle et des additions 1922. を併せ讀むべきである。

2. E. Kieckers : Einführung in die indogermanischen Sprachwissenschaft, I. Band Lautlehre, München 1933. ｢Neudruck Berlin-Leipzig 1933.
3. K. Brugmann : Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, Strassburg 1902—4, (French translation : Abrégé de grammaire comparée des langues indo-européennes trad. par J. Bloch, A. Cuny et A. Ernout sous la direction de A. Meillet et R. Gauthiot, Paris 1905.)

4. K. Brugmann : Grundriss der vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, 2. Aufl. Strassburg 1897—1916 : 「three thick volumes).

Bd. I. Einleitung und Lautlehre, Bd. II. Lehre von den Wortformen und ihrem Gebrauch (in この種の内最も浩瀚なるもの。初版は 1886—1900 に出で B. Delbrück と共著になつてゐる。Ⅳ. 2 參照。尙初版の第一及び第二卷は J. Wright, R. S. Conway, W. H. D. Rouse によつて英譯せられてゐる (New York 1888 –1895)。

5. H. Hirt : Indogermanische Grammatik, Teil I : Einleitung. I. Etymologie, II. Konsonantismus, Teil II : Vokalismus, Teil Ⅲ : das Nomen, Teil IV : Doppelung, Zusammensetzung, Verbum, Teil V : der Akzent, Heiderberg 1921—1929.

第四と全く體裁を異にする。個人的創見に富むと雖も時に穩健を缺く。第二卷及び第五卷は Ablant 及び accent に關する Hirt の特色ある見解を載せてゐる。

Ⅳ. 比 較 文 章 法。

1. F. Sommer : Vergleichende Syntax der Schulsprachen (Deutsch, Englisch, Französisch, Griechisch, Lateinisch) mit besonderer Berücksichtigung des Deutschen, 2. Aufl. Leipzig-Berlin 1925. 〔elementary〕 「4, 1. Aufl. Bd. III—V.
2. B. Delbrück : Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen, Strassburg 1893—1900, = III.
3. J. Wackernagel : Vorlesungen über Syntax mit besonderer Berücksichtigung von Griechisch, Lateinisch und Deutsch, 2 Bde, Basel 1920, 1924, 2. Aufl. 1926, 1928.

尙 syntax 研究に志す者には概說書として次の諸書がある。

R. Blümel : Einführung in die Syntax, Heidelberg 19.4.

J. Ries: Was ist Syntax? ein kritischer Versuch, 2. Aufl. Prag 1927.

W. Havers : Handbuch der erklärenden Syntax, ein Versuch zur Erforschung der Bedingungen und Triebkräfte in Syntax und Stilistik, Heidelberg 1931.

V. 比較語源辭典。

1. A. Fick : Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen, 4. Aufl. 3 Bde. Götlingen 1890–1909, I. Teil: A. Fick : Wortschatz der Grundsprache, der arischen und der westeuropäischen Spracheinheit (1890);

   II. Teil :Wh. Stokes : Urkeltischer Sprachschatz, übersetzt, überarbeitet und herausgegeben von A. Bezzenberger (1894);

   III. Teil : A. Torp : Wortschatz der germanischen Sprachelinheit (1909).

2. A. Walde : Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen, herausgegeben und bearbeitet von Julius Pokorny, 3 Bde. Berlin-Leipzig 1928–1932.

尙次の辭書は語源辭典ではないが事物を出發點として研究する者には頗る便利である。

O. Schrader: Reallexikon der indogermanischen Altertumskunde, Grundzüge einer Kultur-und Völkergeschichte Alteuropas, 2. Aufl. herausgeg. von A. Nehring, Berlin-Leipzig 1917—1929.

VI. 部分研究書。

高級な研究に移らんとする者の參考として部分的研究書中特に注意すべきもの若干を擧げる。比較的古い著作でも現今尙一讀の價値あるもの，異論の餘地はあつても印歐語比較文法の諸問題の所在を知るに便なるものをも含んでゐる。故に讀者は一般原則を充分に理解して後，獨立研究に進む準備として之を繙くべきである。但し比較文法の發達に重大なる影響を及ほした論文は幾多の小冊子又は專門雜誌中に發表されてゐる事を忘れてはならぬ。

1. F. de Saussure : Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes Leipzig 1879 = Recueil des publications scientifiques de F. de Saussure, Genève 1922 pp. 1—268.
2. H. Hübschmann : Das indogermanische Vokalsystem, Strassburg 1885.
3. F. Bechtel : Die Hauptprobleme der indogermanischen Lautlehre seit Schleicher, Göttingen 1892.
4. J. Schmidt : Kritik der Sonantentheorie, Weimar 1895.
5. R. Gauthiot : La fin de mot en indoeuropéen, Paris 1913.
6. H. Güntert : Indogermanische Ablautprobleme, Strasburg 1916.
7. M. Grammont : Traité de phonétique, Paris 1933.

8. P. Persson : Studien zur Lehre von der Wurzelerweiterung und Wurzelvariation, Uppsala 1891.
   " : Zur Frage nach sogenannten Wurzeldeterminativen = Beiträge zur indogerm. Wortforschung Teil II. Uppsala 1912.
9. N. Flensburg : Studien auf dem Gebiete der indogermanischen Wurzelbildung I. Lund 1897.
10. H. Güntert : Über Reimwortbildungen im Arischen und Altgriechischen, Heidelberg 1914.

11. J. Schmidt : Die Pluralbildungen der indogermanischen Neutra, Weimar 1889.
12. E. Audouin : De la déclinaison dans les langues indo-européennes, Paris 1898.
13. H. Osthoff : Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen, Heidelberg 1900.
14. H. Petersson : Studien über die indogermanische Heteroklise, Lund 1921.
   " : Zur Kenntnis der indogermanischen Heteroklise, Lund 1922.

15. G. Dottin : Les désinences verbales en R en sanskrit, en italique et en celtique, Rennes 1896.
16. J. Charpentier : Die verbalen r-Endungen der indogermanischen Sprachen, Uppsala 1917.
17. K. Brugmann : Die Demonstrativpronomina der indogermanischen Sprachen, Leipzig 1904.
18. K. Brugmann : Pronominale Bildungen der indogermanischen Sprachen, Leipzig 1908. ⌈Leipzig 1907.
19. K. Brugmann: Die distributiven und die kollektiven Numeralia der indogermanischen Sprachen,
20. E. Schwentner : Die primären Interjektionen in der indogermanischen Sprachen, Heidelberg 1924.

21. W. Havers : Untersuchungen zur Kasussyntax der indogermanischen Sprachen, Strassburg 1911.
22. K. Brugmann : Die Syntax des einfachen Satzes im Indogermanischen, Berlin-Leipzig1925.
23. G. Cuendet : L'ordre des mot dans le texte grec et dans les versions gotique, arménienne et vieux slave des évangiles I. Les groupes nominaux, Paris 1929.

24. F. Bechtel : Über die Bezeichnungen der sinnlichen Wachrnehmungen in den indogermanischen Sprachen, Weimar 1879.
25. B. Delbrück : Die indogermanischen Verwandtschaftsnamen, Leipzig 1889. ⌈1893-1894.
26. K. Brugmann: Die Ausdrücke für den Begriff der Totalität in den indogermanischen Sprachen, Leipzig
27. E. Gottlieb : A systematic tabulation of Indo-European animal names, Philadelphia 1931(=Language Dissertations VIII). ⌈guage Dissertations IX).
28. G. Sh. Lane : Words for clothing in the principal Indo-European languages, Baltimore 1931 (=Lan-

VII. 研　究　史。

1. Th. Benfey : Geschichte der Sprachwissenschaft und orientalischen Philologie in Deutschland seit dem Anfange des 19. Jahrhunderts mit einem Rücksicht auf die früheren Zeiten, München 1869.

2. V. Thomsen : Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts, übersezt von H. Pollak, Halle (Saale) 1927.

3. H. Pedersen : Lingnistic science in the nineteenth century, methods and results, translated by J. W. Spargo, Cambridge (Mass.) 1931.

4. Stand und Aufgaben der Sprachwissenschaft, Festschrift für Wilhelm Streitberg, Heidelberg 1924 : Indisch von H. Reichelt (238—252), Iranisch von H. Reichelt (273—289), Die bisherigen Ergebnisse der hethitischen Sprachforschung von Johannes Friedrich (304—318), Griechisch von Adolf Walter (319—360), Altitalische Dialekte von J. B. Hofmann (361—391), Altgermanische Dialekte von C. Karstien (392—418), Deutsch von V. Michels (463—511), Die englische Sprachwissenschaft von W. Horn (512—584), Der heutige Stand der romanischen Sprachwissenschaft von J. Jordan(585—621), Baltische Sprachen von F. Specht (622—648), Slavisch von K. H. Meyer (649—670),

5. Die Geschichte der indogermanischen Sprachwissenschaft seit ihrer Begründung durch Franz Bopp, begründet von Wilhelm Streitberg, II. Abteilung : Die Erforschung der indogermanischen Sprachen, Band I : Die griechiche Sprache von A. Thumb; Die italischen Sprachen von A. Walde; Vulgärlatein von K. v. Ettmayer; Die keltischen Sprachen von R. Thurneysen, Berlin-Leipzig 1916.
Band II : Germanisch von W. Streitberg und V. Michels, 1. Lieferung 1927.
Band III : Slavisch-Litauisch von A. Brückner; Albanesisch von N. Jokl, 1917.
Band IV, 1. Hälfte : Indisch von W. Wüst, 1929 ; 2. Hälfte : Iranisch von H. Reichelt ; Aremnisch

von H. Zeller, 1927. ⌈Etruskisch von E. Fiesel, 1931.

Band V, 1. Lieferung : Hethitisch und "kleinasiatische" Sprachen von J. Friedrich, 1931 ; 4. Lieferung:

VIII. 雜　　誌。

1. Indogermanische Forschungen, Zeitscrift für Indogermanistik und allgemeine Sprachwissenschaft, begründet von K. Brugmann und W. Streitberg, herausgeg. von F. Sommer und A. Debrunner, Berlin-Leipzig (1891ff.).
2. Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiet der indogermanischen Sprachen, begründet von A. Kuhn, herausgeg. von W. Schulze und H. Oertel, Göttingen ="Kuhns Zeitschrift," (1852ff.). ⌈1906·
3. Beiträge zur Kunde der indogermanischen Sprachen, herausgeg· von A. Bezzenberger, Göttingen 1877—
4. Mémoire de la Société de linguistique de Paris, 1868ff.
   Bulletin de la Société de linguistique de Paris, 1868ff.
5. The American Journal of Philology, founded by B. L. Gildersleeve, Baltimore(1880ff.).
6. Language, Journal of the Linguistic Society of America, Baltimore(1925ff.).
7. Wörter und Sachen, Kulturhitorische Zeitschrift für Sprach-und Sachforschung, begründet von R. Meringer, Heidelberg (1909ff.).
8. Indogermanisches Jahrbuch, begründet von A. Thumb und W. Streitberg, Berlin-Leipzig(1914ff.)

IX. 各國語の歷史・文法・語源字典。

a. 古代印度語(サンスクリット語)。

J. Mansion : Esquisse d'une histoire de la langue sanscrite, Paris. 1931.

J. Bloch : L'indo-aryen du Véda aux temps modernes, Paris (sous presse).

A. Thumb : Handbuch des Sanskrit, Heidelberg 1905; 2. Auflage verbessert und mit Nachträgen versehen von H. Hirt, Heidelberg 1930.

J. Wackernagel : Altindische Grammatik. I : Lautlehre, Göttingen 1896; II. 1: Einleitung zur Wortlehre, Nominalkomposition, 1905; III. Wackernagel und A. Debrunner : Nominalflexion, Zahlwort, Pronomen, 1930. ⌈1899.

C. C. Uhlenbeck : Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch der altindischen Sprache, Amsterdam 既に現時の要求を滿す事は出來ない。又 Ernst und Julius Leumann : Etymologisches Wörterbuch der Sanskrit-Sprache (a—jū), Leipzig 1907 は未完成のまゝなる故，本年より公刊さるべき W. Wüst : Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch des Alt-Indoarischen (Altindischen), Heidelberg に期待する所大である。

b. 古代ペルシャ語及びアヴェスタ語。

Ch. Bartholomae : Vorgeschichte der iranischen Sprachen = Grundriss der iraniscen Philologie I. Strassburg 1895, 1—151,

〃 : Awestasprache und Altpersisch ib. 153—248.

H. Reichelt : Awestisches Elementarbuch, Heidelberg 1909. ⌈Benveniste, 1931.

A. Meillet : Grammaire du vieux-perse, Paris, 1915, 2e éd. entièrement corrigée et augmentée par E.

Ch. Bartholomae : Altiranisches Wörterbuch, Strassburg 1904 ; Zum altiranischen Wörterbuch Stra-

ssburg. 1906 = Indog. Forsch. XIX. Beiheft.

c. ア ル メ ニ ヤ 語。

A. Meillet : Altarmenische Grammatik, Heidelberg. 1912. 〔descriptive〕
〃 : Esquisse d'une grammaire comparée de l'arménien classique, Wien. 1903.

H. Hübschmann : Armenische Etymologie = Armenische Grammatik I, Leipzig 1897.

d. ア ル バ ニ ヤ 語。

G. Meyer : Kurzgefasste albanesische Grammatik mit Lesestücken und Glossar, Leipzig 1888. 〔descriptive〕 其他の文典も皆記述的で比較文法の見地より書かれた文典は未だない。頗る興味ある著作として次のものがある。N. Jokl: Linguistisch-kulturhistorische Untersuchungen aus dem Bereiche des Albanischen, Berlin-Leipzig 1923.

G. Meyer : Etymologisches Wörterbuch der albanesischen Sprache, Strassburg 1891.

e. ス ラ ブ 語 派。

F. Miklosich : Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen, 4 Bde, Wien 1874–1879. (Band II und IV in Neudruck, Heidelberg 1926).

W. Vondrak : Vergleichende slavische Grammatik, 2 Bde, 2. Aufl. Göttingen 1924 und 1928.

J. J. Mikkola : Urslavische Grammatik, I. Lautlehre, Vokalismus, Betonung, Heidelberg 1913.

A. Meillet : Le slave commun, Paris 1924

O. Broch : Slavische Phonetik, Heidelberg 1911.

古代教會スラブ語。

A. Leskien : Handbuch der altbulgarischen (altkirchenslavischen) Sprache, 6. Aufl. Heidelberg 1922. 〔descriptive〕
″ : Grammatik der altbulgarischen (altkirchenslavischen) Sprache 2—3. Aufl. Heidelberg 1919.
W. Vondrak : Altkirchenslavische Grammatik. 2. Aufl. Berlin 1912.
St. Kulbakin : Le vieux slave, Paris 1929.
N. van Wijk : Geschte der altkirchenslavische Sprache, I. Laut- und Formenlehre, Berlin-Leipzig 1931.
P. Diels : Altkirchenslavische Grammatik, Heidelberg 1932.

A. Meillet : Etudes sur l'étymologie et le vocabulaire du vieux slave, 2 vols. Paris 1902, 1905.

F. Miklosisch : Etymologisches Wörterbuch der slavischen Sprachen, Wien 1889.
E. Berneker : Slavisches etymologisches Wörterbuch, I. A—L, Heidelberg 1908.
R. Trautmann : Baltisch-Slavisches Wörterbuch, Göttingen 1923.

f. バ ル ト 語 派。

1. リ ス ア ニ ヤ 語。

A. Leskien : Litauisches Lesebuch mit Grammatik und Wörterbuch, Heidelberg 1919. 〔chiefly descriptive〕

古き文典としては，

A. Schleicher : Handbuch der litauischen Sprache, 2 Bde, Prag 1856—1857;

F. Kurschat : Grammatik der litauischen Sprache, Halle 1876;

O. Wiedemann : Handbuch der litauischen Sprache, Strassburg 1897.

があるが現今の要求を満す事ができず又最近の好著 A. Senn : Kleine litauische Sprachlehre, Heidelberg 1929 も亦記述的である。故に比較文法の研究者には今尙次の諸書が重要である。

A. Bezzenberger : Beiträge zur Geschichte der litauischen Sprache, Göttingen 1877.

A. Leskien : Der Ablaut der Wurzelsilben im Litauischen, Leipzig 1884.

〃 : Die Bildung der Nomina im Litauischen, Leipzig 1891.

H. H. Bender : A. Lithuanian etymological index, Princeton 1903.

2. レット語。

J. Endzelin : Lettisches Lesebuch, Grammatische und metrische Vorbemerkungen , Texte und Glosar, Heidelberg 1922. 〔elementary〕

〃 : Lettische Grammatik, Heidelberg 1923.

G. ギリシャ語。

O. Hoffmann : Geschichte der griechischen Sprache, I (Bis zum Ausgange der klassischen Zeit), Sammlung Göschen, 2. Aufl. 1916. ［Leipzig—Berlin 1927.

P. Kretschmer : Sprache in A. Gercke und E. Norden : Einleitung in die Altertumswissenschaft, 3. Aufl.
P. Kretschmer : Einleitung in die Geschichte der griechischen Sprache, Göttingen 1896.
A. Meillet : Aperçu d'une histoire de la langue grecque, 2e éd. Paris 1920.
(German translation of the 1st ed. by H. Meltzer, Heidelberg 1920.)

F. Slotty : Einführung ins Griechische ······auf sprachwissenschaftlicher Grundlage, Bonn 1922. (elementary)
F. Sommer: Sprachwissenschaftliche Erläuterungen für den griechischen Unterricht, Laut-und Formenlehre, Leipzig-Berlin 1917. (elementary)
J. Wright : Comparative grammar of the Greek language, London 1912.
E. Kieckers : Historische griechische Grammatik, 4 Bände, Sammlung Göschen, 1925–1926.
A. Meillet et J. Vendryes : Traité de grammaire comparée des langues classiques, 2e tirage Paris 1927.
H. Hirt : Griechische Laut-und Formenlehre, 2. Aufl. Heidelberg 1912.
K. Brugmann : Griechische Grammatik, 4. Aufl. bearbeitet von A. Thumb, München 1913.

C. D. Buck : Introduction to the study of the Greek dialects, 2nd ed. Boston 1928.
A. Thumb : Handbuch der griechischen Dialekte, 2. Aufl. von. E. Kieckers, Heidelberg 1932.

W. Prellwitz : Etymologisches Wörterbuch ber griechischen Sprache 2. Aufl. Göttingen 1905.
E. Boisacq : Dictionnaire étymologigue de la langue grecque, Paris et Heidelberg 1917.

h. イタリヤ語派。

1. 古代方言。

C. D. 3Buck : A grammar of Oscan and Umbrian, Boston 1904. (German trans. by E. Prokosch, Heidelberg 1905)

R. von Planta : Grammatik der oskisch-umbrischen Dialekte, 2 Bände, Strassburg 1892, 1897.

R. S. Conway : The Italic dialects, 2 vols. Cambridge 1897.

2. ラテン語。

F. Stolz : Geschichte der lateinischen Sprache, Sammlung Göschen, 2. Aufl. 1922.

J. Marouzeau : Le latin, 2e éd. Paris 1927.

A. Meillet : Esquisse d'une histoire de la langue latine, 2e éd. Paris 1931.

尚ギリシャ語項下に擧げた P. Kretschmer : Sprache (Gercke-Norden : Einleitung) はラテン語をも含んでゐる。同樣に P. Hinneberger : Die Kultur der Gegenwart Teil I. Abteilung VIII, 3. Aufl. Leipzig-Berlin 1924 は J. Wackernagel : Die griechische Sprache (pp. 371—397), F. Skutsch : Die lateinische Sprache (pp. 523–565) を含んでゐる。

F. Sommer : Lateinische Schulgrammatik mit sprachwissenschaftlichen Anmerkungen, 2. Aufl. Frankfurt a. M. 1923. 〔elementary〕

W. M. Lindsay : A short historical Latin grammar, 2nd ed. Oxford 1915.

〃 〃 : The Latin language, an historical account of Latin sounds, stems and forms, Oxford 1894. (German transl. by H. Nohl, Leipzig 1897)

E. Kieckers : Historische lateinische Grammatik, 2 Bde, München 1930, 1931.

F. Sommer : Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre 2. Aufl. Heidelberg 1914;
Kritische Erläuterungen 1914. 「München 1928.

F. Stolz und J. J. H. Schmalz: Lateinische Grammatik, 5. Aufl. von M. Leumann und J. B. Hofmann,

倘ギリシャ語項下に擧げた A. Meillet et J. Vendryes : Grammaire comparée des langues classiques はラテン語をも含み入門書として頗るよい。この外兩國詞を同時に扱つたものに次の書がある。

V. Henry : Grammaire comparée du grec et du latin, 6e éd. Paris 1908.

P. Giles: A short manuel of comparative philology for classical students, 2nd ed. London 1901.

E. H. Grandgent : An introduction to vulgar Latin, Boston 1907.

J. B. Hofmann : Lateinische Umgangssprache, Heidelberg 1926.

F. Muller : Altitalisches Wörterbuch, Göttingen 1926. 「1930 – (in progress).

A. Walde: Lateinisches etymologisches Wörterbuch, 2. Aufl. Heidelberg 1910, 3. Aufl. von J. B. Hofmann,

A. Ernout et A. Meillet: Dictionnaire étymologique de la langue latine, Paris 1932.

3. ロ マ ン ス 語。

W. Meyer-Lübke: Einführung in das Studium der romanischen Sprachwissenschaft 3. Aufl. Heidelberg 1920. 「1906.

Grundriss der romanischen Philologie, herausgegeben von G. Gröber, Band I, 2. Aufl. Strassburg

G. Millardet : Linguistique et dialectologie romanes, Paris 1923.

⌈1914.

E. Bourciez : Eléments de linguistique romane, Paris 1910.

A. Zauner : Romanische Sprachwissenschaft, Sammlung Göschen, 2 Bde, I. 4. Aufl. 1921, II. 3. Aufl.

W. Meyer- Lübke : Grammatik der romanischen Sprachen, 4 Bde, Leipzig 1890—1901. (French transl. by Rabiet and Doutrepont, 4 vols., Paris 1890--1906.)

W. Meyer-Lübke : Romanisches etymologisches Wörterbuch, 2. Aufl. Heidelberg 1919, 3. Aufl. 1930—(in progress.)

各ロマンス語の文典を擧げる遑はないが，次の二叢書は權威ある歴史文典を含んでゐる。

Sammlung romanischer Elementar- und Handbücher, Heidelberg (Carl Winter).

Sammlung kurzer Lehrbücher der romanischen Sprachen und Literatur Halle a. S. (Niemeyer).

尙フランス語の語源辭典としては次の諸書がある。

O. Bloch : Dictionnaire étymologique de la langue française, avec la collaboration de W. von Wartburg, Paris 1932. E. Gamillscheg: Etymologisches Wörterbuch der französischen Sprache, Heidelberg 1929.

W. von Wartburg : Französisches etymologisches Wörterbuch I. (A-B)Bonn 1928, II. Berlin (in progress).

i. ケ ル ト 語 派。

E. Windisch : Keltische Sprachen (=Grundriss der roman. Philologie Bd. I. 2. Aufl. 283—312).

H. Zimmer : Die keltischen Sprachen (=Hinneberger : Die Kultur der Gegenwart Teil I. Abteilung XI. 1909, 1—46).

G. Dottin : Manuel pour servir à l'étude de l'antiquité celtique, 2e éd. Paris 1915.

H. Pedersen : Vergleichende Grammatik der keltischen Sprachen, 2 Bde, Göttingen 1909, 1913.

Wh. Stokes : Urkeltischer Sprachschatz, übersetzt, überarbeitet und herausgegeben von A. Bezzenberger
=A. Fick : Vergleichendes Wörterbuch II. Teil, Göttingen 1894.

1. ガ リ ヤ 語。

G. Dottin : La langue gauloise, Paris 1920.
L. Weisgerber : Die Sprache der Festlandkelten, Frankfurt a. M. 1931.
W. Holder : Alt-Celtischer Sprachschatz, Leipzig 1913.

2. 古代アイルランド語。

J. Pokorny: Altirische Grammatik, Sammlung Göschen, 1925
″: A concise Old Irish grammar and reader. I. Grammar, Halle a. s. 1914.
J. Vendryes : Grammaire du vieil-irlandais, Paris 1908.
R. Thurneysen : Handbuch des Altirischen. Grammtik, Heidelberg 1909.

j. ゲ ル マ ン 語 派。

F. Kluge :Urgermanisch. Vorgeschichte der altgermanischen Dialekte, Strassburg 1913. = Grundriss der

germanischen Philologie 3. Aufl. Bd. 2.
A. Noreen : Abriss der urgermanischen Lautlehre mit besonderer Rücksicht auf die nordischen Sprachen, Strassburg 1894.
R. Löwe : Germanische Sprachwissenschaft, Sammlung Göschen, 2 Bde, 3. Aufl. 1922, 1924.
W. Streitberg : Urgermanische Grammatik, Heidelberg 1896.
H. Hirt : Handbuch des Urgermanischen, 3 Bde, Heidelberg 1931, 1932, 1934.
A. Meillet : Caractères géneraux des langues germanigues, 3e éd. Paris 1926.

F. Dieter : Laut-und Formenlehre der altgermanischen Dialekte, Leipzig 1900.
F. Kaufmann : Deutsche Grammatik. Kurzgefasste Laut-und Formenlehre des Gotischen, Alt-, Mittel-und Neuhochdeutschen, 8.Aufl. Marburg 1918.

V. Henry : Précis de grammaire comparée de l'anglais et de l'allemand, 2e éd. Paris 1907. ⌈—1898.
J. Grimm : Deutsche Grammatik, 4 Bde, 1819—1837, neuer Abdruck besorgt von W. Scherer Berlin 1870
W. Wilmanns : Deutsche Grammatik, Gotisch, Alt-, Mittel-und Neuhochdeutsch. Strassburg, I. 3. Aufl. 1911, II. 2. Aufl. 1899, III. 1. 1906, III. 2. 1909.
H. Falk und A. Torp : Wortschatz der germanischen Spracheinheit = A. Fick : Vergleichendes Wörterbuch III. Teil, Göttingen 1894.

ゴ ー ト 語。

M. H. Jellinek : Geschichte der gotischen Sprache, Berlin-Leipzig 1926 = Grundriss der germ. Philologie

3. Aufl. Band I. 1.

W. Braune : Gotische Grammatik, 9. Aufl. Halle 1920.

F. Kluge : Die Elemente des Gotischen, eine erste Einführung in die deutsche Sprachwissenschaft Berlin-Leipzig 1921 (Neudruck).

J. Wright : Grammar of the Gothic language, Oxford 1921.

W. Streitberg : Gotisches Elementarbuch, 6. Aufl. Heidelberg 1920.

E. Kieckers : Handbuch der vergleichenden gotischen Grammatik, München 1928.

S. Feist : Etymologisches Wörterbuch der gotischen Sprache, 2. Aufl. Halle a. S. 1923.

其他の各ゲルマン語の歴史或は文典は既に擧げた "Grundriss"（第三版以後は分冊刊行）及び次の二叢書に含まれてゐる。

Germanische Bibliothek, Heidelberg (Carl Winter).

Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte, Halle a. S. (Niemeyer).

尙語源字典として特に次のものを推稱する。

Fr. Kluge : Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache 10. Aufl. Berlin-Leipzig 1923, 11. Aufl. mit Unterstüzung durch W. Krause bearbeitet von A. Götze, 1930 – (in progress).

H. Falk und A. Torp : Norwegisch-dänisches etymologisches Wörterbuch, 2 Bde, Heidelberg 1910, 1911.

k. トカラ語。

E. Sieg und W. Siegling : Tocharisch, die Sprache der Indoskythen. Vorläufige Bemerkungen über eine bisher unbekannte indogermanischen Literatursprache. 〔mit einem Nachwort von R. Pischel〕 Sitzungsber. der Berliner Akad. 1908, 915—934.

A. Meillet : Le tokharien, Indogern. Jahrbuch I. 1914, 1—19.

E. Sieg, W. Siegling und W. Schulze : Tocharische Grammatik, Gottingen 1931. 〔descriptive〕

A. Meillet et S. Lévi : Les noms de nombre en tokharien B, Mémoire de la Société de Linguistique de Paris XVII, (1912,) 281—294.

A. Meillet et S. Lévi : Remarques sur les formes grammaticales de quelques textes en tokharien B.

I. Formes verbales, ib. XVIII, (1912,) 1—33

II. Formes nominales, ib. XVIII, (1913), 381—423.

l. ヒッタイト語。

A. Debrunner : Die Sprache der Hethiter, Bern 1921.

G. Herbig : Wege und Ziele der hethitischen Sprachforschung, Indogerm. Jahrbuch VIII. 1922, 1—20.

F. Hrozny : Die Sprache der Hethiter, ihr Bau und ihre Zugehörigkeit zum indogermanischen Sprachstamm, 2 Bde, Leipzig 1916, 1917.

C. J. S. Marstrander :Caractére indo-européen de la langue hittite, Christiania 1919.

G. A. Barton : A Hittite manual for beginners, Paris 1928. [short & descriptive]

L. Delaporte: Manuel de la langue hittite : I. Syllabaire hittite cunéiforme, II. Eléments de la langue hittite, Paris 1929. [descriptive], III. Textes hittites en transcription, Paris 1933.

E. H. Sturtevant : A comparative Grammar of the Hittite language, Philadelphia 1933.

E. H. Sturtevant: Hittite glossary, words of known or conjectured meaning with Sumerian ideograms and Accadian words common in Hittite texts, Baltimore 1931.

昭和九年七月十日印刷
昭和九年七月十五日發行

國語科學講座
（第九回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院